地質学雑誌　第113巻　第2号（通巻1337号）付録　昭和27年6月10日第三種郵便物認可　平成19年2月15日発行（毎月1回15日発行）

日本地質学会 News

Vol.10 No.2 February 2007

国際惑星地球年とは
2007-2009

planetearth®
Earth Sciences for Society
2007 - 2009

国際惑星地球年は，地球の過去・現在・未来を研究する科学者達の国際組織である国際地質科学連合（IUGS）とユネスコとが共同でとりくむ国際的プログラムです。2005年の第60回国連総会は2008年を国際惑星地球年としました。国連に参加する181もの国や地域が，そして地球上に住む人々が，地球と人類の持続可能な未来のためには地球科学の知識と技術が欠かせないことを広く知り，それを積極的に活用するためにです。

2004年の津波のような自然災害は地球の持っている信じられない力を私たちに見せつけます。しかし，私たちは地球科学の知識を効果的に用いることで，命を救い，財産を守ることができます。その知識はまた，世界の人口増加による地球資源の需要拡大を持続可能な方法でまかなうことができるのです。

国際惑星地球年は「社会のための地球科学」を標語として，国連による国際惑星地球年2008を中心とする2007年から2009の3ヶ年を惑星地球の3ヶ年として，様々な活動に取り組みます。そのために，国際地質科学連合とユネスコを中心に，12もの国際的団体の協力により非営利法人「国際惑星地球年」（略称IYPE法人）が設立されました。

国際惑星地球年活動の大きな柱はアウトリーチプログラムとサイエンスプログラです。 地球科学が，どのようにして社会的課題の解決を可能とするか，また人々がどのようにしてそれをよく知り，親しむことができるか，解決の可能性・潜在性と認知の波及性にむけて取り組むプログラムです。プログラムが真に社会の力になるためには，国連に結集した国や地域が， それぞれのレベルでプログラムに取り組む必要があります。そのために，多くの国々で国内委員会が組織されつつあります。

いよいよ始まりました！！

国際惑星地球年(IYPE)日本委員会推進事務局
〒305-8567 つくば市東1-1-1 中央第7
(独)産業技術総合研究所
地質調査総合センター内
http://www.gsj.jp/iype/index.html

日本地質学会*News*

Vol.10 No.2 February 2007

The Geological Society of Japan *News*
日本地質学会/〒101－0032　東京都千代田区岩本町２－８－15
井桁ビル　６F
編集委員長　大友幸子
TEL　03－5823－1150　FAX　03－5823－1156
main@geosociety.jp（庶務一般）
journal@geosociety.jp（編集）
http://www.geosociety.jp

planetearth®
Earth Sciences for Society
2007 – 2009

Contents

2007年度代議員（全国区）選挙・理事選挙・評議員選出結果のお知らせ ……2

案内 ……4
第41回日本水環境学会年会/普及講演会「地層から読み解く地球環境：過去から学ぶ地球環境の現在と未来」/第21回太平洋学術会議：21st Pacific Science Congress

公募 ……4
東北大学東北アジア研究センター教員公募/土木研究所技術推進本部専門研究員公募

各賞・助成 ……5
2007年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

紹介 ……6
貝が語る縄文海進－南関東，＋２℃の世界－　松島義章著（矢島道子）/シリーズ日本の歴史災害　第６巻「昭和二八年　有田川水害」藤田　崇・諏訪　浩編（横田修一郎）/新潟県中越地震　新潟の大地災害と生活　高浜信行編著（小坂共栄）

CALENDER ……8

学協会・研究会報告 ……9
国際地質科学連合（IUGS）第57回理事会への参加報告（公文富士夫・天野一男）/IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」開催式典　開催報告（宮崎光旗）

Geologist物語 ……11
日米開戦直前の北京の地質屋（1）（津田貞太郎）

支部コーナー ……13
関東支部　研究発表会「関東地方の地質」一般講演募集のお知らせ/東北支部　総会・例会のご案内

院生コーナー ……14
American Geophysical Union Fall Meeting 2006参加報告（山口飛鳥）

学会記事 ……15
2006年度第７回理事会議事録
2006年度第３回定例評議員会議事録

会員の個人認証（ID・パスワード）のお知らせ

会員の個人認証システムを整備いたしました．学会HP上での会員向けの情報提供に対して必要となるID・パスワードは以下の通りです．

ID：会員番号（雑誌送付時の封筒に記載されている７ケタの数字）
パスワード：氏名のアルファベット頭文字（小文字）＋会員番号

例）会員NO 1234567の地質太郎（Chishitsu Taro）さんの場合
ID：1234567，パスワード：ct1234567
（注）氏名頭文字の「ふ」→「F」，「ち」→「C」と登録しています．

このIDとパスワードは個人固有のものです．他人に教えたり，流用したりしないで下さい．現在学会HP上では，「**会員のページ**」，「**Island Arc誌の無料閲覧**」**のアクセスの際に，このIDとパスワードが必要となっています．**

今年11月以降に入会された方は，登録が完了していませんので次の共通コードを利用して下さい．
ID：geosociety，パスワード：gsj.

ご不明な点は，学会事務局<main@geosociety.jp>までお問い合わせ下さい．

（日本地質学会オンライン化委員会）

第114年学術大会（2007年札幌大会）トピックセッション，シンポジウム募集中

2007年９月９日（日）～11日（火）に北海道大学で開催予定の第114年学術大会のトピックセッション（10件程度）とシンポジウム（８件程度）の募集を行います．それぞれの企画に応募する方は，**３月19日（月）までに**，日本地質学会行事委員会宛（main@geosociety.jp）にお申し込みください．詳細は，ニュース誌12月号またはホームページをご覧ください．

（日本地質学会行事委員会）

広告一部取扱：株式会社廣業社
〒104－0061 東京都中央区銀座8－2－9　電話 03－3571－0997　　印刷・製本：日本印刷株式会社

2007年度代議員（全国区）選挙・理事選挙・評議員選出結果のお知らせ

2007年１月15日
選挙管理委員会　委員長　関　陽児
委　員　澤田　臣啓
委　員　加藤　潔
委　員　高橋　路輝
委　員　西村　瑞恵

選挙細則ならびに選挙内規に基づき，標記選挙を実施いたしました．結果は，下記のとおりとなりましたのでご報告いたします．

記

１．代議員選挙

⑴ 全国区，地方区ともに，立候補者数が定数を越えなかったため，立候補者全員を無投票当選といたしました．ただし，選挙細則第４条９項に従い，全国区の代議員のなかから評議員を選出するための投票を行いました．

⑵ 全国区代議員の選挙実施結果

有権者総数　4,484名
投票用紙発送数　4,281通
有効投票数　921通　無効投票数　２通
（有効　915票，白票　６票，無効　２票）

２．理事選挙

立候補者数が定数（７名）どおりであったため，投票は行なわず，全員当選といたしました．

１．天野　一男　茨城大学
２．上砂　正一　田中環境開発（株）
３．斎藤　眞　産業技術総合研究所
４．藤本光一郎　東京学芸大学
５．宮下　純夫　新潟大学
６．矢島　道子　非常勤講師
７．渡部　芳夫　産業技術総合研究所　（50音順）

３．評議員の選出

理事選出者を除いた全国区の代議員から，代議員選挙の得票数に基づき，評議員を20名選出いたしました．なお，評議員選出にあたっては，選挙細則に基づき，次の事項を優先的に考慮し，選出いたしました．

＜日本地質学会選挙細則第４条（役員，代議員および評議員選挙）＞

７　評議員は毎年，定数の半数を選出する．評議員の選出は全国区代議員の選挙結果にもとづいて20名を決定する．決定にあたっては所属別定員充足数を考慮する．

８　評議員選挙の当選者の決定の際には，それぞれの支部所属者が最低１名含まれるように，選出順位の調整を行うこととする．

＜開票時の代議員選出者一覧＞

※◎は理事選出者（７名），○印は評議員選出者（20名）．
なお，評議員選出者はそのまま代議員と兼任になりますが，理事選出者は代議員ではなくなります．

全国区（49名）（得票順）

◎１天野　一男	茨城大学	大学	465
○２大友　幸子	山形大学	大学	464
○３保柳　康一	信州大学	大学	459
◎４矢島　道子	非常勤講師	小中高	443
○５脇田　浩二	産業技術総合研究所	官公庁	436
○６三宅　康幸	信州大学	大学	429
○７高木　秀雄	早稲田大学	大学	423
○８磯﨑　行雄	東京大学	大学	421
○９新妻　信明	静岡大学	大学	417
○10永広　昌之	東北大学総合学術博物館	大学	414
○11柴　正博	東海大学社会教育センター・博物館	官公庁	402
◎12上砂　正一	田中環境開発（株）	会社	400
○13沢田　順弘	島根大学	大学	395
○14北里　洋	海洋研究開発機構	官公庁	390
○15山路　敦	京都大学	大学	389
○16川端　清司	大阪市立自然史博物館	官公庁	388
○17卜部　厚志	新潟大学	大学	386
18荒井　章司	金沢大学	大学	381
19楡井　久	（NPO）日本地質汚染審査機構	区分なし	376
○20阿部　国広	川崎市立西有馬小学校	小中高	374
○21荒戸　裕之	帝国石油（株）	会社	368
22伊藤　慎	千葉大学	大学	367
23清水以知子	東京大学	大学	366

24	松本　良	東京大学	大学	361
◎25	渡部　芳夫	産業技術総合研究所	官公庁	359
◎26	斎藤　眞	産業技術総合研究所	官公庁	359
27	藤林　紀枝	新潟大学	大学	356
○28	堀　利栄	愛媛大学	大学	356
29	三田村宗樹	大阪市立大学	大学	353
○30	松本　俊幸	国際航業（株）	会社	349
31	狩野　彰宏	広島大学	大学	341
32	里口　保文	滋賀県立琵琶湖博物館	官公庁	336
33	星　博幸	愛知教育大学	大学	334
○34	山根　誠	応用地質（株）	会社	321
35	竹内　誠	名古屋大学	大学	318
36	清川　昌一	九州大学	大学	315
37	福冨　幹男	ジェイアール九州コンサルタンツ（株）	会社	313
38	坂井　卓	九州大学	大学	313
○39	中川　光弘	北海道大学	大学	302
40	柏木　健司	富山大学	大学	298
41	中西　健史	国際石油開発（株）	会社	298
42	町山　栄章	海洋研究開発機構	官公庁	296
43	小荒井　衛	国土地理院	官公庁	295
44	石井　和彦	大阪府立大学	大学	294
45	青木　隆弘	（株）親和テクノ	会社	260
46	田村　嘉之	（財）千葉県環境財団	官公庁	257
47	笠原　豊	千葉県環境研究センター	官公庁	239
48	本山　功	筑波大学	大学	238
49	於保　幸正	広島大学	大学	214

地方区（49名）：全地方区において定員を越えず，無投票当選.

北海道（定員３）

1 田近　淳　北海道立地質研究所
2 岡村　聡　北海道教育大学
3 前田仁一郎　北海道大学

東北（定員３）

1 鎌田耕太郎　弘前大学
2 川村寿郎　宮城教育大学
3 西川　治　秋田大学

関東（定員19）

1 坂口　有人　海洋研究開発機構
2 七山　太　産業技術総合研究所
3 笠間　友博　神奈川県立生命の星・地球博物館
4 山本　高司　川崎地質（株）
5 外田　智千　国立極地研究所
6 芦　寿一郎　東京大学
7 荒井　晃作　産業技術総合研究所
8 安藤　伸　（財）道路保全技術センター
9 緒方　信一　中央開発（株）
10 小澤　一仁　東京大学
11 利光　誠一　産業技術総合研究所
12 府川　宗雄　なし
13 森田　澄人　産業技術総合研究所
14 香東　卓郎　獨協埼玉中学高等学校
15 納谷　友規　産業技術総合研究所
16 横山　芳春　早稲田大学
17 植村　和彦　国立科学博物館
◎18 藤本光一郎　東京学芸大学

中部（定員９）

1 北村　晃寿　静岡大学
2 小井土由光　岐阜大学
3 椚座圭太郎　富山大学
4 竹内　章　富山大学
5 栗田　裕司　新潟大学
6 鈴木　和博　名古屋大学
7 原山　智　信州大学
8 東田　和弘　名古屋大学博物館
◎9 宮下　純夫　新潟大学

近畿（定員６）

1 前川　寛和　大阪府立大学
2 升本　眞二　大阪市立大学
3 此松　昌彦　和歌山大学
4 田上　高広　京都大学
5 田中　里志　京都教育大学
6 林田　明　同志社大学

四国（定員２）

1 村田　明広　徳島大学
2 寺林　優　香川大学

西日本（定員８）

1 金折　裕司　山口大学
2 尾上　哲治　鹿児島大学
3 三宅　誠　岡山県倉敷市立船穂中学校
4 柚原　雅樹　福岡大学
5 鈴木　清一　福岡教育大学
6 西園　幸久　西日本技術開発（株）
7 中村　眞人　なし
8 門藤　正幸　中電技術コンサルタント（株）

ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します．

第41回日本水環境学会年会

期日：**2007年３月15日（木）～17日（土）**
会場：大阪産業大学（〒574-8530　大阪府大東市中垣内３丁目1-1）
詳細情報　関西支部　ホームページ
http://www.jswe-kansai.com/nenkaihp/nenkai41hp.htmlをご覧ください．

内　容
３月15日（木）：一般研究発表/ポスター発表
３月16日（金）：一般研究発表/ポスター発表
・第41回年会記念講演会，および水環境文化賞・クリタ賞等表彰式（太閤園）
・懇親会
・見学会
３月17日（土）：一般研究発表
なお，３月15日（木）夜には全国環境研協議会との合同企画が，３月15日（木）および３月16日（金）には「水質計測・水処理技術展2007大阪」が併催されます．

お問い合わせ
（社）日本水環境学会　事務局
〒135-0006　東京都江東区常盤2-9-7
グリーンプラザ深川常盤201
Tel.（03）3632-5351
Fax.（03）3632-5352
e-mail. info@jswe.or.jp

普及講演会「地層から読み解く地球環境：過去から学ぶ地球環境の現在と未来」

日本堆積学会・産業技術総合研究所地質調査総合センターは，日本堆積学会2007年つくば例会に合わせて，下記の普及講演会を開催します．IPCCの第４次報告書が新聞を賑わしていますが，現在や将来の環境を理解するためには，現在に至る過去からの変遷を知ることが大切です．普及講演会では，沿岸域の防災上重要な巨大津波，日本列島周辺の海洋環境の変動，アジアに多く見られる巨大三角州の変遷を，「堆積物」から読み解きます．会場は，秋葉原からTXつくばエクスプレスで45分の終点つくば駅から歩いて7-8分です．参加費は，無料です．皆様の参加をお待ちしています．

主催：日本堆積学会・産業技術総合研究所地質調査総合センター
協賛：日本IYPE国内委員会
日時：**2007年３月27日（火）15：00～18：30**
場所：つくばカピオ，ホール
プログラム：
３：00－３：10
開会あいさつ
日本堆積学会会長　東京大学　松本　良
３：10－３：30
「地球のことをもっと知ろう：国際惑星地球年IYPEが始まった」
日本IYPE国内委員会委員長，産業技術総合研究所　地質調査総合センター代表　佃　栄吉
３：30－４：20
「巨大津波の痕跡を探る！」
産業技術総合研究所　七山　太
４：20－４：40　休憩
４：40－５：30
「海底堆積物に記録された環境変動」
産業技術総合研究所　池原　研
５：30－６：20
「アジアの巨大三角州の生い立ちと近年の変貌を探る」産業技術総合研究所
斎藤文紀
６：20－６：30
総合討論及び閉会あいさつ
産業技術総合研究所　徳橋秀一

参加費：無料
会場などの情報：http://sediment.jp/04nennkai/2007/annnai.html
問い合わせ先：
産業技術総合研究所
斎藤文紀（e-mail: yoshiki.saito@aist.go.jp）

第21回太平洋学術会議：21st Pacific Science Congress

日程：**平成19年６月12日（火）～18日（月）**
メインテーマ:「太平洋域における自然と社会の多様性」
太平洋学術協会（PSA）は，太平洋地域の学問研究の発 展を通して太平洋地域の諸国民の絆の強化を目的とする国際学術団体で，1920年にハワイで設立されました．日本からは、日本（代表機関：日本学術会議）と沖縄（代表機関：琉球大学）が会員として加盟しており，現在「第21回太平洋学術会議」開催に向けて，日本学術会議と国内13学術団体及び沖縄県内８大学が協力して運営・準備を進めています．
この太平洋学術会議は，極めて多くの学問分野を包括し，かつ現代にマッチした学際的分野までカバーする総合的な会議ですので，多くの研究者・学生・一般市民の皆様のご参加をお願いいたします．

公開シンポジウム「メインテーマ：太平洋域における自然と社会の多様性」
日時：６月16日（土）午前・午後
会場：沖縄コンベンションセンター
同時通訳付き・参加費無料

世界的に著名な研究者をお招きして公開シンポジウムを開催します．同時通訳付き，参加費無料ですので，高校生，教員，一般の方どなたでも参加できます．

論文投稿，参加申込み受付中．
要旨提出期限を２月28日（水）に延長しました．
詳細につきましては，http://www.psc21.netでご覧いただけます．

問い合わせ
第21回太平洋学術会議事務局
（琉球大学学術国際部国際企画課内）
TEL 098-895-8032
FAX　098-895-8037
www.psc21.net
E-mail：psc21@to.jim.u-ryukyu.ac.jp

公募

教官公募等の求人ニュース原稿につきましては，採用結果をお知らせいただけますようお願い致します．

東北大学東北アジア研究センター教員公募

１　公募分野
東北アジア研究センター地域環境研究部門地球化学研究分野
２　職　　名　教授　１名
３　専門分野
火山学，地質学，岩石学などの研究分野．その上で，日本，朝鮮，中国，モンゴル及びロシアなど，東北アジアを研究対象とした実績があること．
４　応募資格
博士の学位を持ち，専門分野において卓越した業績を有すること．フィールド研究の経験を有し，日本を除く東北アジアを対象とする研究に対して熱意を有する者．また文系など異分野との研究連携についても前向きである者．国籍を問わない．英語による十分な研究能力と，日本語による事務処理能力を有すること．
５　担当授業科目
（学部）地球物質科学関連科目及び地質調査の指導．（大学院）上記の専門分野にかかわる大学院理学研究科で必要な授業科目
６　年　　齢　55歳以下
７　採用予定日　平成20年４月１日
８　応募締切日
2007年４月27日（金）必着
９　提出書類
①　履歴書（写真貼付のこと）
②　研究業績一覧（論文・著書・その他．論

文については査読の有無による区分をして記載すること.）

③　主要な業績10点（別刷り・コピー可，各１部）それぞれに400字程度の日本語の要旨をつけること.

④　今までの研究について，上記10点に触れつつレビューを行ってください．日本語で2000字以内.

⑤　着任後の研究・教育に対する抱負を書いてください．日本語で2000字以内.

⑥　フィールド調査経験，共同研究・国際共同研究の企画・参加状況，シンポジウム及び国際会議の開催・招待講演，所属学会，新聞寄稿，政策提言等，及び審議会委員その他各種社会貢献，等々が分かるデータの一覧（該当する項目について記載すること.）

⑦　現在までに取得した科学研究費補助金等の各種外部資金のデータ一覧

⑧　教育経験が分かる授業科目等のデータ一覧（平成18年度を含む最近５カ年間）授業科目名と指導学生数（博士・修士の学位授与に関わった場合はそれについても記載すること）など.

⑨　現在の所属機関での各種委員会や運営面で果たした役割（平成18年度を含む最近５カ年間）

⑩　その他研究教育等の面で特記事項がある場合は，1000字以内で記載すること.（ない場合は提出不要.）

⑪　その他審査の必要に応じて資料・書類提出を求めることがある.

10　留意点

東北大学は，平成16年４月１日，国立大学法人東北大学に移行したので，法人教員としての採用となる．また，平成19年４月１日から東北アジア研究センターの改編により，部門の名称が変更になる場合がある.

11　書類提出先

〒980－8576　仙台市青葉区川内41番地
東北大学　東北アジア研究センター長宛

（書類を入れた封筒の表に「教員公募関係書類（地球化学研究分野）」と朱書し，「書留」で郵送して下さい.）

12　問い合わせ

TEL　022-795-6009
（東北アジア研究センター事務室）
E-mail：asiajimu@cneas.tohoku.ac.jp
（できるだけE-mailでの問い合わせをお願いします.）

土木研究所技術推進本部　専門研究員公募

１．募集人員：１名

２．研究内容：

土木研究所が実施しているプロジェクト研究の一環として，河川堤防支持地盤を含む平野表層地盤の物性と構造について，コア試料詳細分析，ボーリング柱状図のデータベース化，および統合GISを用いた対象サイトの３次元地盤構造・物性モデル構築に関わる研究を担当していただきます.

３．応募資格：

以下の条件を全て満たすもの.

１）博士の学位を有する者（平成19年３月31日までに取得見込みのものを含む），２）平成19年４月中に着任可能であること，３）土質コア試料分析，柱状図解釈に関する研究経験を有し，関連論文を２編以上公表していること，４）国際会議・学会での発表経験を有していること，５）統合GISソフトの一つであるTNTMipsを用いた地盤情報管理経験を有していること.

４．提出書類：

様式自由，書類は全てＡ４版，(1) 履歴書，(2) 業績書，(3) 研究論文リスト，(4) 研究論文別刷り（２件以上），(5) 学位取得証明書，(6) 成績証明書，(7) 業務に関する抱負（600～1000文字以内でＡ４版１枚），(8) 関連実績が論文だけでは示せない場合は内容がわかる何らかのもの.

５．応募期限：**2007年３月19日（月）必着**

封筒表に「公募書類」と朱書きして簡易書留あるいは宅配便で送付してください.

６．雇用予定期間：2007年４月中旬～2010年３月31日

７．書類提出先・問い合わせ先：

〒305-8516　茨城県つくば市南原1-6
独立行政法人土木研究所
技術推進本部　稲崎　富士
TEL：029-879-0884

８．選考方法：

書類審査（一次）および面接（二次）に基づき，応募資格を満たす者のうちから，応募資格３），４），５）に関連する研究実績，現地計測探査技術の経験および３次元地盤構造モデル構築の実績を考慮して最も優れたものを選考します．なお面接の際の旅費は支給しませんのでご了承ください.

９．関連WEBサイト：

http://www.pwri.go.jp/renewal/bid_rental/recruit03.html

各賞・研究助成

日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします．推薦ご希望の方は締切日半月前までに，理事会までお申し込み下さい.

2007年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者の募集

学会としての推薦、または個人からの推薦のいずれからでもお受けします.申請書類は，地球化学研究協会のホームページからダウンロードして下さい.

１．三宅賞

対　象：地球化学に顕著な業績をおさめた研究者

表彰内容：賞状，副賞として賞牌および賞金30万円，毎年１件（１名）

２．奨励賞

対　象：推薦締切日に35才以下で，地球化学の進歩に優れた業績を挙げ，将来の発展が期待される研究者

表彰内容：賞状および賞金10万円，毎年１件（１名）

３．応募方法：

申請書に略歴，推薦理由，研究業績などを記入し，主な論文10編程度（三宅賞），２編程度（奨励賞）をそえて，下記のあて先へ送付して下さい.

応募書類等は，三宅賞及び奨励賞選考のためにのみ選考委員会などで用いられます.

４．締切日：**2007年８月31日（金）**

注；地質学会からの学会推薦を希望される場合は，８月３日（金）までに必要書類を整えて，地質学会事務局まで学会までお申し出ください.

５．地球化学研究協会ホームページ：

http://wwwsoc.nii.ac.jp/gra/

６．応募先：

〒100-8212 東京都千代田区丸の内1-4-5
三菱UFJ信託銀行リテール受託業務部
公益信託グループ
（公益信託）地球化学研究基金
江川康治

７．問合せ：

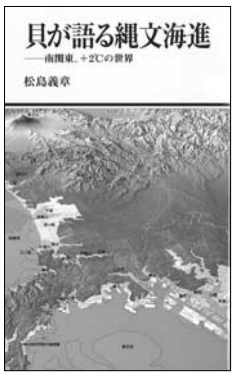
地球化学研究協会事務担当まで，電子メールでお願いします.

E-mail: t-sagi@ka5.koalanet.ne.jp

紹　介

貝が語る縄文海進
ー南関東，＋2℃の世界ー

松島義章　著



（有隣堂，2006年12月20日発行，新書判，219ページ，ISBN4-89660-198-XC0244
定価1000円＋税）

本書の副題に「＋２℃の世界」と書いてあったので，2004年の冬から2005年にかけて神奈川県立生命の星・地球博物館が開催した企画展「＋２℃の世界－縄文時代に見る地球温暖化－」に関連した書物かなと思って手にとったら，なんと1997年の著者の退官記念講演に手を入れたものとわかった．10年がかりの著書である．いつも丁寧な仕事をされる著者ならではのことであろう．

沖積層の貝化石を調べ始めたのは，1970年からだという．横浜市内で地下鉄工事が行われ，路線に沿って貝化石を含む沖積層を連続的に調べることができ，また，片瀬川の支流である柏尾川の拡幅改良工事にともなっても，沖積層の貝化石を調べることができ，現在，南関東には生息していないハイガイやカモノアシガキなどの貝化石の産出に興味がわいたという．評者は，著者の研究のほぼ初期から，近くにいたので，著者の研究法は確立されており，非常に順調に研究は進んできたものと思っていた．著者が最初に相談された鹿間時夫氏が「沖積層の化石は現生種だけである．博物館で貝化石を研究するには少なくとも更新世，それより古い地質時代の化石を研究することが望ましい」と反対されたことを初めて知り，非常に驚いた．『進化学』という著書のある，非常に先見的な発言をされていた鹿間氏の発言だったから一層驚いた．あるいは鹿間氏は「博物館」ということを非常に気にされていたのであろうか．ともかく著者の研究のスタートは厳しいものであったし，ある意味で前人未踏の研究であったことを初めて知った．

本書でもうひとつ驚いたのは，著者が研究の初期から「科学的な推測」にもとづく研究を心がけていたことである．1973年１月の杉村　新氏と長谷川善和氏との雑談がきっかけという．「大型の脊椎動物化石の発掘時に科学的な推測をもとにされているか」という質問と「かなりの化石はアマチュアの人たちの発見が発端となっていて，専門家による発見は稀であった．しかし，最近ではこれまでの研究成果をもとにかなり予測して調査をおこない，実績をあげることが可能となっている」という回答である．著者は大変な衝撃を受け，科学的な予測による調査をこころがけたという．著者が随時に行う研究発表を，評者は時にまだるっこく聞いていたことがあった．なるほど，あのじれったさは著者のこういった意図だったのかと合点がいった．それでは，前人未踏の沖積層貝化石研究の集大成を見ていこう．

まず，著者は沖積層の貝化石が持っている情報を整理している．すべて現生種だから，現生種の生態的な特徴や，分布の特異性，生物地理的な情報をそのまま適応できる．群集組成を調べれば内湾か外海か，砂底か泥底か岩礁か，古環境を推定できる．貝の種類から海陸の分布すなわち古地理や海流の動向を知ることができる．貝化石の^{14}C年代測定により，地層の年代を知ることができる．著者は，この３つの情報を丁寧に組み合わせ，織り上げていく．

相模湾沿岸の大船や鎌倉や逗子などが縄文海進時には奥深い湾をなしていたことがヴィヴィッドにわかってくる．相模川低地は少し広い内湾だったこともわかるし，大磯丘陵の中村川流域の内湾は突然消滅したこともわかってきた．段々調査地域がひろがってくる．貝塚遺跡の貝種構成も重要な研究データとして組み込んでいく．東京湾沿岸の海岸線がほぼ約1000年単位で復元されていく．房総半島南端の沼サンゴ礁が詳細に解明されていく．サンゴ礁形成時の海面上昇が確定する．そして南関東における海進最盛期以降の地殻変動も追跡できた．この手法は，伊勢湾知多半島でも，縄文海進時の細かい海面変動を明らかにすることができた．

東北地方や北海道の沖積層の貝化石や貝塚出土の貝の種構成を調査していくと，日本列島全体をめぐって，海域が変化してきたことがわかってくる．ハイガイなどの亜熱帯種は約9500年前から関東地方に出現し，約7900～7600年前には仙台周辺，三陸海岸南部には約4500年前まで分布し，その後はどんどん後退して1960年では伊勢湾以南に分布するだけとなった．北海道には温暖種がかすめるように分布する．こうして過去１万年くらいの日本列島をめぐる水塊の動きが手にとるようにわかる．そして，ついにハワイ諸島カウアイ島でも，著者の研究法を応用でき，カウアイ島では約4000年前の旧海面がプラス1.3mに残されていたという新知見をえることができた．著者が着実に積み上げてきた研究法は留まることを知らない．まだまだ面白いことがでてきそうである．

本書を読みながら，なるほど，貝塚遺跡はこうすれば古生物学的研究になるのだなあと評者は確認した．日頃，「化石を研究しています」というと，多くの人に「ああ，遺跡の発掘ね」と言われ，「いえ，遺跡の発掘ではなく，化石の発掘です」と何度も否定しなくてはならなかった評者は，「はい，貝塚の貝も研究しています」と言いたかったなあとしみじみと思った．発掘の楽しみを共有する形で，古生物学の楽しみを伝えるほうがよかったなあと思い直している．

（矢島道子）

シリーズ日本の歴史災害
第６巻
「昭和二八年 有田川水害」

藤田　崇・諏訪　浩　編

（古今書院，2006年12月20日発行，Ｂ５判，224ページ，定価3,000円，ISBN4-7722-4065-9）

シリーズ「日本の歴史災害」の第６巻として，上記の編者を含めた地形・砂防・地質などの専門家５名の共同執筆によるものである．シリーズを企画された小林芳正氏の「災害の軽減には過去の教訓を活かさねばならない」という巻頭言での主張は，災害を実感として伝えたいという本書の編集に活かされている．

有田川水害といっても，読者でご存知な方は少ないに違いない．昭和28年７月，和歌山県北部を中心に「7.18水害」とよばれる災害が発生したが，有田川流域，なかでも源流部の花園村を中心とした斜面・土砂災害は大規模であった．本書によれば，7.18災害全体では死者・行方不明者は1,000名以上，花園村だけでも同100名以上に達したとある．

第二次大戦の終了から10年も経ていない昭和28年は水害が多発した特異な年であり，梅雨前線と台風による７月，８月，９月の豪雨は北九州や京都府南部など西日本各地に甚大な被害をもたらした．７月の豪雨では有田川上流域でも３日間に600～700mmの雨量が記録され，最大時間雨量は100mm前後と推定されている．

花園村では50万m^3の大崩壊が１集落を全滅させ，500万m^3に達する崩壊土砂が高さ95mの巨大天然ダムを出現させた．後者は同年９月の豪雨で破堤し，災害を拡大させた．こうした有田川源流部の土砂災害は昭和28年の水害のなかでも特筆すべきものである．

この災害に焦点を絞った本書は以下に示す全８章とプロローグより構成されている．

第１章　花園村
第２章　地質の概要
第３章　昭和28年７月の気象と災害
第４章　7.18水害－有田川災害
第５章　斜面災害－山崩れ・山津波
第６章　「おれ，死ぬと思った」
　　－山崩れの恐怖
第７章　天然ダム（地すべりダム）
第８章　復旧・復興に向けて

このうち，被災者の証言を含めたインタビューの第６章が全224ページの半分以上を占める．これによって災害前後における降雨や河川の増水，崩壊発生などの時系列的な状況変化の他に，被災前後の住民の生活，被災後の片づけ，役場壊滅に伴う仮役場の設置などの復旧活動が克明に語り尽くされている．

石積みの段々畑上部から流下してきた土砂が家屋に襲いかかり，その直後，傷ついた人々が泥のなかからはい上がる光景，隣接する高野町からの救援隊の駆けつけや被災者の尾根つたいの避難などの経緯説明は，事実証言であるだけに緊迫感がある．

プロローグに記されている水害記念碑前での編者と災害経験者との出会いは偶然かも知れないが，その後のインタビューや写真を通じて50年前の人々の行動を掘り起こし，それを軸に災害前後の状況が忠実に描きだされている．後生に生きたかたちで伝えたいという編者の願いは実を結んでいるといえよう．

土砂災害直後の空中写真撮影は今日では当然でもあるが，本災害での林野庁による空中写真撮影はそうした最初期のもののようである．これを活用して調査された故羽田野誠一氏の未公表資料も一部掲載されている．継続降雨量と崩壊発生率の関係，一連の崩壊発生による支流河川も含めた河床変化など，貴重な資料といえる．

集落全滅をもたらした大崩壊に関して，斜面頭部にキレツが現れていたとの証言は，前兆現象として重要であるが，行政担当者がいかにしてこうした情報を採り上げて伝達し，避難，対策などに活かせるかは今日にいたっても課題である．

このように本書は昭和28年当時の社会状況下で山村に発生した巨大災害とそこに住む人々のかかわり，またその後始末におわれた人々の活動記録でもある．人々は災害発生にどのように対処していったかを知るうえで貴重な一書である．

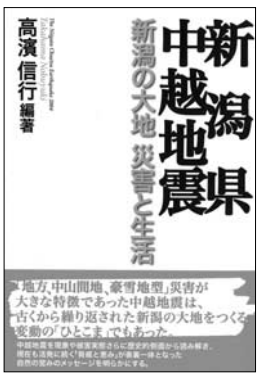
なお，本書は冒頭に記した企画からいえば，専門家よりもむしろ一般の読者が対象と思えるが，付加体の概念からはじまる花園村の地質説明など少し違和感がある．説明は一般向けに近いものの，災害発生現場とは視点とスケールが異なるためであろう．一方，地質学の立場からは，崩壊部の地形・地質断面図が少なく，崩壊形態や表層堆積物の記述等にもやや物足りなさを感じるが，本書の趣旨からそれらは割愛されたと理解したい．ただし，地形図など挿入図が全般に小さくて見にくい点は惜しまれる．

ところで，日本地質学会では数年前に「地質災害委員会」が設置されたが，年数を経ていないこともあり，十分機能しているとは思えない．地質学の社会貢献を意識しすぎている面や研究者が専門性にとらわれすぎている面があるためかもしれない．そういったことを考えながら，本書を読ませていただいた．関係者にも一読をお勧めしたい．

（横田修一郎）

新潟県中越地震
新潟の大地　災害と生活

高浜信行　編著



（新潟日報事業社．2006年11月出版．
サイズ21×15cm，255ページ，
ISBN4-86132-190-5，定価1,680円（税込））

2004年（平成16年）10月23日，新潟県中越地方を襲った地震（新潟県中越地震）は，内陸直下型地震として甚大な被害を生みました．

本書は，高浜信行氏をはじめとする新潟大学災害復興科学センターの教員，その他コンサルタントや地方自治体の職員など６名の地質を専門職とするメンバーによって執筆され，2006年11月に出版されたものです．本文は，第１章　中越地震と被害の特徴（風岡修・卜部厚志），第２章　中越地震発生の背景―新潟の大地の成り立ちと中越地震（高浜信行・風岡　修），第３章　19年ぶりの豪雪が被災地を襲う（河島克久・和泉　薫），第４章　中山間地農業と土砂災害（高浜信行），第５章　災害は「弱点」を的確に突いてくる（安井　賢），第６章　新潟の地震災害予測（高浜信行・卜部厚志）の計６章から構成されています．

本書が，全国各地で発生した過去の地震被害やその発生原因に関する類書の多くと大きく異なる点は，記述が現地で見られる事実にもとづいて極めて多面的かつ具体的であり，説得力があるということでしょう．地震にかかわる記述は，地震の発生が地下深部での岩盤破壊によることから，ともすれば地表の地質状況からかけ離れて抽象的になりがちであったり，物的・人的な被害の側面が強調されるきらいがあります．しかし本書では，第１章において各地における岩盤崩落・斜面崩壊・地すべりの記述に始まり，旧河川流路堆積物による被害，段丘地域での被害，液状化による建物・農地・堤防被害などの記述がなされ，特に建物の被害分布がどのような特徴を持っているかについて，地表地質との関係で具体的に述べられています．また，その結果が地球物理学的なデータとも良く一致し，激震ゾーンという言葉で分かりやすく解説されています．このような，地震被害の特性をその地域の地質の状況に照らして説明し，あるいは地球物理学的データを地質学的データを基本にして説明しようとする姿勢は，本書に終始一貫してみられるものであり大きな特徴です．地震そのものは，地下深部における物理現象であり地表部に広範囲に大きな影響を与えるものであっても，その震動の表れ方が表層部の地質の特性の違いに大きく影響されることが，最近とみに強く指摘されています．その意味で，普段に個々の地域の地質について豊かな情報を持っている地質屋の強みが，本書では随所に発揮されているといえます．そのことは，第２章　中越地震発生の背景―新潟の大地の成り立ちと中越地震　の文章中にも如何なく発揮されています．

これは，本書の執筆陣の多くが長年にわたって信濃川流域における地質の研究に「信濃川ネオテクトニクス団体研究グループ」の主要なメンバーとして共同で取り組んできた経験と実績がものを言っているのでしょう．

また，本書では，第３章で豪雪地帯で起きた地震という点で，複合災害という視点で今後の災害予防にも触れています．第４章では，今回の地震が中山間地の地すべり多発地帯での地震であったことから，中山間地農業と環境・国土保全問題にも言及しています．さらに第５章では，丘陵部で進められた大規模造成地や河道部の埋立地，道路盛り土などの人工地盤災害についても取り上げ，災害は人為的に作られた「弱点」を的確に突いてくることを指摘し，防災を考える上で見落としてはならない視点を指摘しています．最終章の第

6章　新潟の地震災害予測では，古文書に残された地震記録と遺跡発掘による古地震記録の解析結果を結びつけて，越後地方でのこれまでの地震発生の癖をどう読み解くかについて解説し，今後の新潟における地震災害やそれによる被害の予測，自分の命は自分で守る（自助）の精神と周囲の人と協力して対応する（共助）の精神が大切だということを強調して締めくくられています．

本書で述べられている内容は，もちろん新潟県中越地域という地域性の強いものが圧倒的に多いわけですが，地震被害を極力減らすために，一般の方はもちろんですが地質関係者にとっても汲み取るべき教訓も随所に盛り込まれており，全国の地質学会会員の方々にぜひ一読をお薦めしたい一書です．

（小坂共栄）

CALENDAR

2007.3～

地球科学分野に関する研究会，学会，国際会議，などの開催日，会合名，開催学会，開催場所をご案内致します．会員の皆様の情報をお待ちしています．
☆印は，日本地質学会行事．

2007年

3月　March

○第41回日本水環境学会年会
3月15日（木）～17日（土）
場所：大阪産業大学
http://www.jswe.or.jp/index.html

☆東北支部総会・例会
3月17日（土）～18日（日）
会場：秋田大学（秋田市手形学園町）
問い合わせ先：秋田大学環境資源学研究センター
高島：takasima@ipc.akita-u.ac.jp,
村上：hidekim@cges.akita-u.ac.jp

☆日本地質学会構造地質部会春の例会
3月16日（金）～18日（日）
場所：和歌山県白浜町　ホテルベイリリー
http://www.geosociety.jp/organization/bukai/struct/struct-index.html

○Second International Conference on the Geology of the Tethys
3月19日（月）～23日（金）
場所：Cairo University
Fax: 002-02-5728843
Tel.: 002-02-5676887，002-012 2926034
E-mail：elsayedyoussef2005@yahoo.com, elsayedyoussef@hotmail.com
http://geosociety.jp/calendar/2007-2nd-Tethys.pdf

○日本地理学会2007年春季学術大会
3月20日（火）～22日（木）
（ただし総会・代議員会は19日）
場所：東洋大学
問い合わせ先：渡辺満久（東洋大学）
電話　03-3945-8288
http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajg/home_J.html

○日本堆積学会2007年つくば例会
3月27日（火）～31日（土）
会場　つくばカピオ（茨城県つくば市）
http://sediment.jp/

5月　May

☆日本地質学会第114年総会（2007年度代議員総会）
5月20日（日）17：00-19：00
会場　幕張メッセ（地球惑星連合大会内）
http://www.geosociety.jp

○日本地球惑星科学連合2007年大会
5月19日（土）～24日（木）
会場：幕張メッセ国際会議場
http://www.jpgu.org/

○日本地下水学会2007年春季講演会
5月26日（土）
会場：千葉大学松戸キャンパス
http://www.groundwater.jp/jagh/

6月　June

☆関東支部総会・研究発表会「関東地方の地質」
6月10日（日）10：00～17：00
会場：早稲田大学国際会議場第1会議室
講演申込締切：3月30日（金）
講演要旨締切：5月10日（木）
http://www.geosociety.jp

○第21回太平洋学術会議：21st Pacific Science Congress
6月12日（火）～18日（月）
会場　沖縄コンベンションセンター
メインテーマ：「太平洋域における自然と社会の多様性」
詳しくは，www.psc21.net

○地質学史懇話会
6月16日（土）
会場：北とぴあ　901号室
加藤碩一：宮澤賢治と地質学ほか
http://www.geocities.com/jahigeo/jahigeo.html

○Eurasian Geological Seminor 2007-Geodynamic Process of Asia:Its Origin, Crustal Evolution, and Natural Resources Potential-
6月18日（月）～28日（木）
場所：Mongolian University of Sciences and Technology, Ulaanbaatar, MONGOLIA
問い合わせ先：
Kazuhiro Tsukada
E-mail;tsukada@num.nagoya-u.ac.jp
Fax: +81-52-7895896

○GEOINFORUM-2007第18回日本情報地質学会総会・講演会
6月21日（木）～22日（金）
会場　島根県民会館
http://www.jsgi.org/

○日本古生物学会2007年年会・総会
6月29日（金）～7月1日（日）
会場：大阪市立大学
シンポジウム：中古生代温室期の地球生物相（29日）
http://ammo.kueps.kyoto-u.ac.jp/palaeont/meeting-f.html

9月　September

☆第114年日本地質学会学術大会
9月9日（日）～11日（火）
会場　北海道大学（札幌市）
トピックセッション・シンポジウム募集
3月19日（月）締切

10月　October

○第3回国際シンポジウム“東および南アジアの地質学的解剖”（IGCP516）
10月8日（月）～14日（日）
場所：インド・デリー大学
http://staff.aist.go.jp/hara-hide/igcp516

11月　November

○第4回“Gondwana to Asia”国際シンポジウム・国際ゴンドワナ研究連合2006年学術大会
11月8日（木）～10日（土）
会場：九州大学・西新プラザ
問い合わせ先：gond-asia@scs.kyushu-u.ac.jp：中野伸彦（九州大学）
http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/2007gond-asia/

学協会・研究会報告

国際地質科学連合（IUGS）第57回理事会への参加報告

国際交流委員会　**公文富士夫**　　IUGS・ISSC委員　**天野一男**

2007年１月16～20日，春日山の麓にある奈良県新公会堂で，国際地質科学連合（International Union of Geological Sciences）の第57回理事会（Executive Committee）が開催されました．理事会は各国を持ち回りで行われており，今回は日本の順番でした．奈良大学の西脇二一会員にお世話をいただいての開催でした．

日本はIUGSを財政的にも支える有力国であり，現在は東京大学の松本　良会員が理事メンバー（評議員）になられています．日本学術会議にもIUGSに対応する小委員会（分科会に昇格予定）が設置されています．佐藤正名誉会員は前の副会長を努めておられました．今回はユネスコの国際地球惑星年（IYPE; 2007～2009年）の初年度における日本でのEC開催と言うことで，正規の委員やオブザーバー以外にもIUGS小委員会やIGCPに関わる日本人の関係者の参加も呼びかけられていました．私たちも国際交流委員会やIUGS・ISSC委員であることと，「ちょっと好奇心」という気持ちもあって，公文は２日間，天野は５日間参加しました．

出席者には事前に会議の議事日程と資料が電子ファイルで送付されてきました．110ページにわたる膨大なもので，ちょっと大変だという印象が先行しました．公文は17-18日と中間部分の参加であったのですが，出席者の日程・事情に応じて報告や議題を多少前後させながら，また，重要事項にはいろいろの意見が出る中で会議が運営され，膨大な事項を順次処理していく様子はなかなか見事なものでした．IUGS内の諸組織の活動（予算・決算，国際層序委員会など），ユネスコなどの協力関係にある機関との共同事業，IUGS傘下の32の専門分野ごとの国際学術団体（例えばIASやINQUAなど）の把握，上部団体である国際学術連合（ICSU）の関係などその活動は多岐にわたっていました．地質学会としても日頃から国際団体とも関係を保ち，とくに若い会員が国際的な学術団体においてもますます活動できるように援助していきたいと考えています．

会議の話題を２,３紹介しておきます．国際層序委員会では中新世中期のSerravallian階の模式地をマルタ島西海岸のFomm Ir-Rih Bayの崖に決定しました．第四紀という年代区分の扱いについては次回IGCオスロで決定するので，意見があれば層序委員会へ出すようにとのことです．次回の万国地質学会議（33rdIGC）はオスロで2008年開催にむけ準備が進んでいます．IUGSの機関誌Episodesは1998年以降の号がオンラインで閲覧できます（www.episodes.org）．IYPEの活動の意義と目的，各国での活動状況が長時間にわたって報告・議論されました．日本では１月22日の開催式典を皮切りに，活動が計画されています．

なお，日本人の出席者は，理事として松本良氏，オブザーバーは，西脇二一，岡田尚武，田崎和江，北里　洋，天野一男，小山内康人，大和田正明，公文富士夫，斎藤文紀，八尾昭，宮田隆夫，佃　栄吉の各氏でした．

正式な報告は会議の議事録ができた後に，松本会員から報告される予定です．

写真１　奈良県新公会堂国際会議室における会議風景

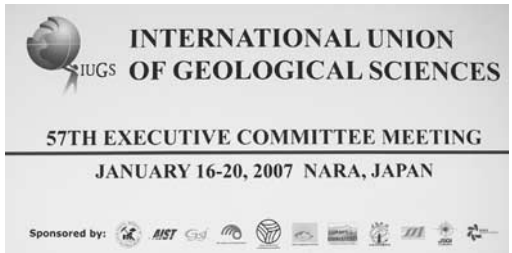


写真２　正面入口看板

IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」開催式典　開催報告

日本学術会議IYPE小委員会幹事　**宮崎光旗**

国際惑星地球年（IYPE）2007-2009のスタートを記念して，2007年１月22日，東京大学理学部小柴ホールでIYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」開催宣言式典が催されました．海外からもIYPE本部事務局長やIUGS，ユネスコ関係者が参列して，総勢100名余の参加がありました（プログラム参照）．

シンポジウム・式典開催に先立ち，プレスレクを実施し，次いで来賓・講演者・IYPE小委員会委員による記念写真撮影が行われました．そのあと，定刻14時よりシンポジウム・式典を開会しました．

佃　栄吉国内委員会委員長による開会の挨拶のあと，国際惑星地球年日本実行委員会名誉会長　有馬朗人氏により国際惑星地球年2007-2009開催が宣言され，日本ユネスコ国内委員会会長　吉川弘之氏，日本地球惑星科学連合代表　浜野洋三氏，および国際地質科学連合　Zhang Hongren氏（代読IUGS事務総長P. Bobrowsky氏）による祝辞が表されました．

有馬名誉会長による宣言では「地球科学の大切さを認識し，一層活用し，世界中でその成果を享楽できるよう，国際惑星地球年2007-2009の開催を宣言する．そして，地球科学の知的すばらしさと社会的有用性，経済的有効性の認知・理解が社会，特に青少年と政策立案者に浸透するよう努力する」ことが謳われました．吉川ユネスコ国内委員会会長は「資源の有限性，気候変動，水と衛生，森林保護などの社会的課題解決に必要な知識の多くは地球科学に関係する．国際惑星地球年で，地球科学者が社会のための科学の実行者として活躍することを期待する」，浜野日本地球惑星科学連合代表は「地球科学と社会との結びつきの強化を目指した国際惑星地球年が開催されるのは大変うれしい．日本の地球惑星科学コミュニティとして，日本IYPE国内委員会と協力して，地球惑星科学の役割，意義を社会に宣伝していきたい」，そしてZhang国際地質科学連合会長は「日本での国際惑星地球年開催宣言式典を祝す．国際惑星地球年は，国連ミレニアム開発目標の成就と国連持続可能な開発のための教育の十年の目標達成に多大な貢献をするであろう」と，それぞれ祝辞を述べられました．

その後，国際惑星地球年本部事務局長　E. de Mulder氏とユネスコ生態・地球科学部地球観測課長　R. Missotten氏による基調講演，佃国内委員会委員長による日本の取り組み方針の紹介へと移り，次いで４共催研究機関による発表が行われました．

海洋研究開発機構理事　平　朝彦氏は「海から学んだ事，学ぶ事」，土木研究所地質監

平野勇氏は「土木研究所の地球工学に関連する主な研究とICHARM」，宇宙航空研究開発機構執行役　小澤秀司氏は「衛星による地球環境問題及び防災への貢献」，そして産業技術総合研究所理事　加藤碩一氏は「産業技術総合研究所におけるIYPEへの世界に向けた貢献」として，それぞれ講演が行われました．

シンポジウム・式典は定刻通り16時に閉会し，共催機関による会場ロビーでのポスター・ビデオ展示は17時まで実施されました．
詳しくは，http://www.gsj.jp/iype/be/doc/BE070122A1.htmlをご覧下さい．

（撮影　産総研地質調査総合センター　中島和敏）

IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」開催式典　プログラム

日時：平成19年１月22日（月）
14：00〜16：00
場所：小柴ホール（東京都文京区本郷7-3-1 東京大学理学部１号館　Tel：03-5841-4570）

14：00〜
開会の辞　日本学術会議IYPE小委員会委員長　佃　栄吉
開催宣言　国際惑星地球年日本実行委員会名誉会長　有馬朗人

［祝辞の部］
14：10〜
日本ユネスコ国内委員会会長　吉川弘之
日本地球惑星科学連合代表　浜野洋三
国際地質科学連合会長　Zhang Hongren
（代読　Bobrowsky IUGS事務総長）

［基調講演の部］
14：25〜
国際惑星地球年本部　事務局長　Eduardo de Mulder
ユネスコ生態・地球科学部　地球観測課長　Robert Missotten

［国際惑星地球年への期待の部］
15：05〜
日本IYPE国内委員会　委員長　佃　栄吉
（独）海洋研究開発機構　理事　平　朝彦
（独）土木研究所　地質監　平野　勇
（独）宇宙航空研究開発機構　執行役　小澤秀司
（独）産業技術総合研究所　理事　加藤碩一

16：00　閉会
17：00までポスター・ビデオ展

☆リーフレットシリーズ１・２・３　好評発売中！！

１）大地の動きを知ろう―地震・活断層・地震災害―
200円（非会員300円）
２）大地のいたみを感じよう―地質汚染Geo－Pollutions
200円（非会員300円）
３）大地をめぐる水―水環境と地質環境―
300円（非会員400円）

Ａ２版裏表カラー印刷，ハンディタイプでポスターにもなります．教材としてもご活用いただけます．ご希望の方はFAXまたはe-mailで学会事務局までお申し込み下さい．小額の場合切手送付でも可．
FAX　03-5823-1156　e-mail：main@geosociety.jp

Geologist 物語

地質学と出会った頃/印象に残っている調査，研究/影響を受けた論文，書籍，講義，研究者/現在では観察できなくなった露頭/今だからはなせる裏話/など

津田会員よりお寄せいただいた，戦前の中国でのお話を今月から全４回でおおくりします．

日米開戦直前の北京の地質屋（第１回）

正会員　津田貞太郎（元　日本セメント（株）技師）

私は，蘆溝橋事件の翌年1938年６月から1941年８月末までの３年あまりを浅野セメント（後の日本セメント．現在は太平洋セメント）社員として北京に在住しました．

日本の大きな曲がり角であったこの時代に，多くの地質屋が大陸で活躍しましたが，実像は余り伝えられていない様で，その一端にすぎませんが，北京在住の私の周辺の出来事を書き残しておきたいと思います．

しかし，私も既に九十路，記憶に思い違いも多いことと思いますが，北京で交流のあったほとんどの方々は世を去られていて記憶を確かめるすべもなく，僅かな記録や写真をたよりに想起したものであることをご了承下さい．

本文を書くに当たって当時の北京について少し紹介しておきます．

凸形の城壁に囲まれた古都は軍政下にあるとは言え，私どもの耳に入るような大きな事件もなく，穏やかな美しい杜の都でありました．作家陳　舜臣（1924～）は「北京の旅，1978　平凡社」で，“北京酔い”という言葉を使い，また芥川龍之介は「黄色い紫禁城を繞（めぐ）った合歓（ねむ）や槐（えんじゅ）の大森林，誰だ，この森林を都会などというのは」と書き，２ヶ月以上も中国を旅行して天津を去るとき日本よりも北京に郷愁を感じたといいます．我々の時代にも在留邦人の多くが同じ様な北京酔いにかかっていたのではないかとの思いがあります．現地の邦字新聞である東亜新報に，主幹高木建夫（のち読売新聞コラムニスト）は「北京百景・北京横町」を連載（のち大阪屋書店から「北京横町」として刊行）し，読者に好感を持って受け止められていました．この頃東亜新報の学芸記者となり，北京原人失踪事件を担当した作家中薗英助（1920-2002）も「北京原人伝・北京原人追跡」（後記）で北京酔いの心境で当時を振り返りながら，邦人の多かった牌楼があった東単に近いロックフェラー病院付近を懐かしく描写しています．ことに北京の秋は世界一といわれ，著書のなかで，北京飯店の梅原龍三郎画伯のアトリエからの秋天の紫禁城を，まぶしい別世界のながめとしての記憶を書いていますが，私もまた秋の夕暮れ時に北京飯店の屋上から，波打つ紫禁城の黄金に輝く甍を夢心地で眺めた記憶があります．私が着任した頃は毎朝10時頃，天空から天女を思わせる鳩笛の音が聞こえ，料理は安く，烤羊肉（カオヤンロウ）（ジンギスカン料理）にいたっては４人で１円96銭の正陽楼の領収書が手許に残っています．この頃の在留邦人は約2600人，北京地質研究会が発足したのはこのような時代でした．

北京地質研究会のこと

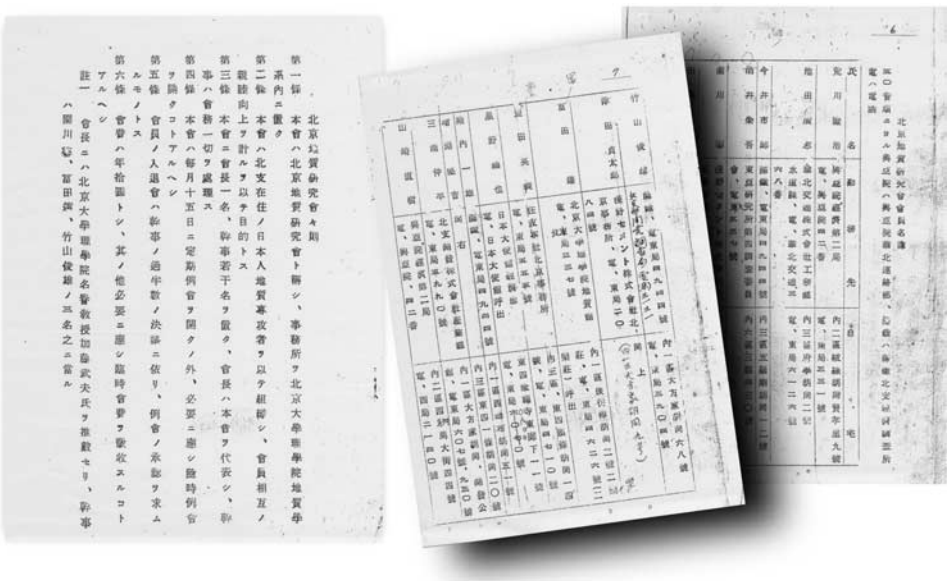
当時北京大学の冨田　達先生の発案で結成された北京地質研究会は地質屋の交流の場として有り難い存在でした．私が北京に着いた頃，既に日本の政府機関・学校・満鉄（南満州鉄道）・北支那開発・民間会社の地質屋がかなり在住していましたが，同邦と顔を合わせるのが珍しい頃でした．1938年３月北京大学理学院の復学（※理学院の復学については日本地質学会史，1953年に詳しい）のために上海自然科学研究所から着任されていた冨田先生は既に在住の地質屋の親睦会構想をお持ちであったらしく，筆者の上司であった園川　馨とともに兵馬司胡同の校舎にあいさつに伺った際，早速この話を持ち出され，まもなく冨田・園川・竹山俊雄（満鉄）の三氏が発起人となって研究会が発足しました．後日人手がそろった1940年頃に作成された会則及び会員名簿が手許に残っています（写真１，２）．

研究会といっても多くは内地からの来訪者を主賓とした親睦会でしたが，庄司誠一さん（北支那開発・調査局）の山西省の石灰岩中の石膏調査の報告，大村一蔵さん（当時　日本石油副総裁）からは当時新聞をにぎわしていた阜新油田調査の裏話を聞く機会にも恵まれました．

手許に残っている会合の記録は次の通りです．

	会場	来賓
1938.09.05	同和居	加藤武夫・藤本治義　等（写真３）
1939.01.21	厚徳福	佐藤戈止
07.05	肪膳	
07.21	春華楼	徳永重康
08.09	慶林春	渡辺久吉
1940.04.06	安福楼	槇山次郎
05.02	安福楼	加藤武夫
05.15	満鉄公館	
?	住友公館	
08.?	墨蝶林（もてりん）	庄司誠一
08.14	安福楼	大村一蔵（写真４）
09.15	鹿鳴春	伊木常誠
1941.03.11	全聚徳	

このほか早坂一郎先生（台北帝国大学）



北京地質研究會會則

第一條　本會ハ北京地質研究會ト稱シ、事務所ヲ北京大學理學院地質學系内ニ置ク

第二條　本會ハ北支在住ノ日本人地質專攻者ヲ以テ組織シ、會員相互ノ親睦向上ヲ計ルヲ以テ目的トス

第三條　本會ニ會長一名、幹事若干名ヲ置ク、會長ハ本會ヲ代表シ、幹事ハ會務一切ヲ處理ス

第四條　本會ハ毎月十五日ニ定期例會ヲ開クノ外、必要ニ應シ臨時例會ヲ開クコトアルヘシ

第五條　會員ノ入退會ハ幹事ノ過半數ノ決議ニ依リ、例會ノ承認ヲ求ムルモノトス

第六條　會費ハ年拾圓トシ、其ノ他必要ニ應シ臨時會費ヲ徴收スルコトアルヘシ

註一　會長ニハ北京大學理學院名譽教授加藤武夫氏ヲ推戴セリ、幹事ハ園川馨、冨田達、竹山俊雄ノ三名之ニ當ル

写真１，２　北京地質研究会会則（左）と会員名簿（右）

写真３　1938.9.3同和居にて．
前列左から園川　馨，－，林　朝棨，加藤武夫，－，藤本治義，花井重次
後列左から筆者，荒川謙治，竹山俊雄，冨田　達，堀内一雄，大西千秋，－，豊田英義，岩生周一，－

写真４　1940.8.14安福楼にて．
前方の卓左から荒川謙治，園川　馨，冨田　達，大村一蔵，山崎直樹，－，－．後方の卓左から増淵堅吉，堀内一雄，酒井榮吾，－，－，筆者

が1938年10月に来燕され２-３日，地質調査所などにお供をしたことがあり，高井冬二さん（東京帝国大学）は1940年10月山西旅行の帰途２週間ほど北京に滞在されましたが，研究会出席の記録は残していません．

冨田先生は会場選びには関心をもたれ，若い人達との交流を楽しみにされていたご様子で，ことに二次会では大菩薩峠（隠岐島後の研究のこと）の論文からは伺えぬ一面を見せて楽しまれていたことを思い出します．私は1941年８月に帰国．この頃の北京には既に鳩笛の音を聞くこともなく，在留邦人も9000人余り，戦時色も強く，研究会もほとんどなくなっていました．まもなく日米開戦，その後の研究会の様子については，冨田先生からもメンバーであった酒井榮吾さん（北京大学，北京在住1939-1948）からも聞くことはありませんでした．

次回，第２回は「周口店の石灰岩調査」です（次号３月号掲載予定）．

2007年の会費払込について

会則により，次年度分の会費を前納下さいますようお願いいたします．会費年度は2005年より４月～翌年３月までに変更されておりますが，会費請求時期につきましては，これまで通り，12月とさせていただいておりますので，ご協力をお願いいたします．2007年４月～2008年３月の会費額は下記の通りです．

基本的な請求額は下記（①）の金額です．アイランドアークを購読されている方は②の金額を加算します．

会員資格	①2007年４月～2008年３月分会費	②アイランドアーク購読料（購読者のみ請求）
正会員	12,000円	8,000円
〃　院生割引　※	8,000円	6,000円
準会員（学部学生）	5,000円	6,000円

※注：大学院に在籍し，定収のない方で所定の申請をされた方のみに適用します．まだ申請されていない方は早急に手続きして下さい．なお，**2006年度分までの会費についての申請は終了しておりますので，2007年度分会費にのみ適用となります．**

１．自動引き落としを登録されている方の引き落とし日は12月25日（月）でした．

2007年度分会費の引き落とし日は12月25日でした．請求書ならびに引き落とし通知の発行は省略させていただきますのでご了承下さい．引き落とし額は基本的には2007年度分会費およびアイランドアーク購読料（印刷物受取の場合）です．これより以前に不足額がある場合には加算され，余剰金（繰越）がある場合はその分を減額して引き落としとなっています．通帳には金額とともに「チシツカイヒ」あるいは「フリカエ」，「SMBC」などと表示されますので必ずご確認下さい．

２．上記以外の方（お振り込み）

12月中旬頃までに請求書兼郵便振替用紙をお送りいたしました．折り返しご送金くださいますようお願いいたします．

３．自動引き落としをご利用下さい．

請求書に同封の書式にてぜひ自動引き落とし申込をお願いいたします．徐々にご利用は増えていますが，学会としては自動引き落としによる払込をより多くの会員に積極的に採用していただきたく，ご理解とご協力をお願いいたします．自動引き落としを希望する方は，「自動払込利用申込書」（10月号巻末掲載）をお送り下さい．

（日本地質学会会計委員会）

支部コーナー

☆関東支部 案内

研究発表会「関東地方の地質」一般講演募集のお知らせ

関東支部では，6月10日に関東地方の地質研究の発展および若手への研究発表の場の提供を目的とした標記研究発表会を開催いたします．また，この研究発表会における一般講演を募集いたします．

地質大構造の議論や地球史研究も，地道な地域地質研究に支えられて展開されてきました．また，地質災害や地盤環境問題を考えるときも，地域地質研究がベースにあってこそ有意義な議論が生まれます．地域地質の研究には，それぞれの地域での研究者間の交流が不可欠です．そして，地域地質の研究を推進・発展させていくことが支部活動の重要な役割と考えます．

この研究発表会では，特に学生・若手研究者・若手技術者への発表の場の提供を考えています．この場合，学会員の有無を問いません．卒論・修論の内容や土木地質の調査結果などを是非この機会に発表し，意見交換や交流の場としてはいかがでしょうか．もちろんベテラン研究者・技術者の方の発表も歓迎いたします．

なお，研究発表会では関東地方の地域地質研究の発表を歓迎しますが，地質学に広く関係する内容ならばそれ以外のテーマも受け付けます．

当日は支部総会も同時開催されます．

日時：**2007年6月10日（日）**10：00～17：00
会場：早稲田大学国際会議場第1会議室
JR山手線高田馬場駅から学バス（02）早大正門行き終点下車徒歩3分
東京メトロ東西線早稲田駅から徒歩5分
プログラム概要：支部長講演・支部総会・研究発表

講演申込要領
講演内容：関東地方の地質研究を歓迎しますが，地質学に関係する内容ならば全て可．
申込資格：学会員（連名の場合はどなたか一人が学会員ならば可），ただし学生および若手研究者・技術者（35歳未満）は学会員でなくとも可．
講演方法：口頭あるいはポスター（口頭発表の場合はパワーポイントによるPCプロジェクター使用とします）
講演持ち時間：15分（質疑応答含む）
講演申込方法：発表者（氏名・所属・責任者連絡先E-mail），発表タイトル，発表形態（口頭・ポスターのいずれか）を下記担当幹事宛に電子メールかファックスでお知らせください．
担当幹事：中澤（産総研），
E-mail:t-nakazawa@aist.go.jp，
FAX　029-861-3591
講演申込締切：**2007年3月30日（金）**
講演要旨締切：**2007年5月10日（木）**，様式は後日お知らせします．

☆東北支部 案内

支部総会・例会のご案内

日程：**2007年3月17日（土）～18日（日）**
17日（土）
13：00～16：30　講演会
16：30～17：30　支部例会
18：00～　懇親会
18日（日）
9：00～11：00　講演会
11：00～12：00　ポスターコアタイム
13：00～15：00　講演会

場所：秋田大学ベンチャービジネス研究棟（VBL）
2階セミナー室（秋田市手形学園町1-1）

問い合わせ先：秋田大学環境資源学研究センター
高島：takasima@ipc.akita-u.ac.jp，
村上：hidekim@cges.akita-u.ac.jp
Tel : 018-889-2449，2446

若手学生の発表が中心となります．支部活動の活性化のため，多数の会員の参加を期待しています．

学会オリジナルフィールドノート 好評発売中！！

サイズ：12×19cm．ハードカバー，ビニールレザー加工，金箔押し．
カラー：チョコレートブラウン．
用紙は野外調査に最適な，雨に濡れても丈夫な高級紙・レインガードを使用しています．是非ご活用下さい．
ご購入を希望の方は，学会事務局まで．　会員頒価　500円／冊．

American Geophysical Union Fall Meeting 2006参加報告

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻
博士課程１年
山口飛鳥

この度，American Geophysical Union（アメリカ地球物理学連合；AGU）のFall Meetingに参加しましたのでその報告をさせていただきます．

＜大会全般に関して＞

この学会は毎年12月にサンフランシスコで開催されている，講演数14000余という文字通り世界最大の地球惑星科学に関する国際学会です．今回は12月11～15日の５日間にわたって以下の21分野に関する発表が行われました．

Union（略称U），Atomoospheric Sciences（A），Atomospheric and Space Electricity（AE），Biogeosciences（B），Cryosphere（C），Earth and Space Science Informatics（IN），Education and Human Resources（ED），Geodesy（G），Geomagnetism and Paleomagnetism（GP），Global Enviromental Change（GEC），Hydrology（H），Mineral and Rock Physics（MRP），Near Surface Geophysics（NS），Nonlinear Geophysics（NG），Ocean Sciences（OS），Paleoceaography and Paleoclimatology（PP），Public Affairs（PA），Seismology（S），Space Physics and Aeronomy（SPA），Tectonophysics（T），Volcanology, Geochemistry and Petrology（V）

これら各分野の中にさらに細分化されたセッションがあります．私は主に自分の研究に関連したTectonophysicsとSeismologyのセッションを中心に見て回りました（後述）．

発表時間は，午前が８時～12時20分，午後が13時40分～18時（途中20分ずつ休憩あり）で日本の学会よりも長く，学会漬けの５日間です．またその他に分野ごとの昼食会や夕食会，講演会，各種プロジェクトのタウンミーティングなどが催されます．今年は米前副大統領のAl Gore氏が”Climate Change: The Role of Science and Media in Policy Making”と銘打った講演を行い，大きな反響を呼びました．途中の休憩ではコーヒーやソフトドリンクのサービスがあり，特に午後の休憩の時間にはポスター会場にビールサーバーが出現し，ビールが振舞われるのが大きな魅力となっています．

AGUの大きな特色は，このビールのサービスにあるように学会中のサービスが非常に充実していることです．日本の学会でもあったら良いなと思うのはIce Breaker（会場入口を使った簡単なビールパーティー）で，開会前日の夕方に行われ旧交を温める場となっています．大きくてきれいな会場（Moscone Convention Center）には大学や企業，研究所，プロジェクトのブースが林立し，各種ポスターやシャープペンシルなどを無料配布しています．NASAやUSGSのポスターはお土産として殊に人気が高く，配布と同時に長蛇の列となることもしばしばです．これは配る側には世界中に宣伝になり，良い相乗効果をもたらしているように見受けられました．またホテルもAGU割引があり，一流ホテルに比較的安価（２人１部屋で１泊$130程度）で宿泊することができます．もっとも，その分参加登録費は学生でも$162とかなり高額です．

＜印象に残った発表など＞

前述の通り，私はTectonophysicsおよびSeismology分野のセッションを中心に聴いていたのですが，近年のトレンドである流体の関与した断層運動，およびその理論・実験・観測結果の統合がますます注目されているという印象を受けました．１日目のFluid-induced FaultingのセッションではR. H. Sibsonが新潟県中越地震をFault valve model流に解釈した発表を行っていましたし，Thermal Pressurizationに関してはJ. Riceらのグループの理論的研究が印象的でした．Fault Damage ZoneのセッションではJ. Chesterの断層におけるエネルギー収支の話が非常に興味深かったです．また京都大学のグループの実験研究も注目されていました．特に印象に残ったのは近年売り出し中のG. Di Toroで，学際的な発表をいくつも掛け持ちしての非常に意欲的な研究姿勢には大いに学ばされました．

沈み込み帯に関連しては，New Perspectives on the Seismogenic Zoneのセッションは日本人も数多く発表しており，この分野での盛り上がりを感じました．また近年流行のLow-frequency Earthquakeに関する発表も，新たにセッションができるほど急増していました．

自分の発表は上記New Perspectives on the Seismogenic Zone のセッションのポスターだったのですが，J. C. MooreやTim Byrneなどの付加体の大御所，またJ. Chesterなど断層岩の専門家と有意義な議論を行うことができました．記載メインのものだったこともあり，地質屋が数多く足を止めて見てくれたのが良かったです．

＜AGUの長所・短所＞

AGUのメリットはやはり，世界最大の地球惑星関連科学の国際学会ということに尽きるでしょう．教科書や論文でしか名前を見ることのなかった世界の研究者の話を聴き，直接議論できるということは何物にも代え難い貴重な経験になります．私は今回３度目の参加でしたが，毎年新たな発見があり大変有益です．一方で，AGUはやや大きくなりすぎた感があります．私が初めて参加した３年前と比較しても明らかに参加者の数が増えており，今回の会場はMoscone Westの他にSouthも使わざるを得なくなっていました．ポスター発表も１日1800件近くあり，全部を見てまわることはほぼ不可能です．大きいがゆえに逆に自分の専門に近いセッションだけで手一杯で，異分野の興味深い発表を聴くことができないというデメリットを感じました．また，もともとが地球物理学の学会であることもあり，やはり地質学系の発表は少なめです．内容も玉石混交で，日本地質学会のほうが進んでいると感じる分野もありました．

しかし，それを差し置いてもAGUの魅力は大きいと思います．それはアメリカの魅力と相通ずるところがあるのかもしれません．日本よりもはるかに大規模な学会で，著名研究者と学生が親しく議論する様子は，特に研究を始めたての大学院修士課程レベルの学生には大きな刺激となるでしょう．日本人の学生もかなりの人数（100人弱？）が参加している模様ですし，ぜひ一度参加されることをお勧めします．

広いポスター会場

学　会　記　事

2007年度　第７回理事会議事録

2007年１月13日
日本地質学会　会長　木村　学

期　日：2006年12月16日（土）
10：00～12：30
場　所：北とぴあ701会議室
出席者：木村会長，伊藤副会長，佃副会長，渡部常務理事・天野副常務理事・上砂・Wallis・大友・狩野・公文・中山・久田・向山　各理事，橋辺（事務局）
欠席理事：倉本・高橋・増田・宮下
＊成立員数（12/17）に対し，出席者13名，委任状３名，欠席者１名で，理事会は成立．

庶務関係（担当理事-上砂）
・火山都市国際会議島原大会（2007年11月19日―３日，島原市）の後援依頼が同実行委員会（中田節也委員長）があり，了承した．
・第21回太平洋学術会議（主催団体）開催プログラム及び参加申込次第が届いた→HP，News誌1月号掲載予定
・第４回ジャパンサイエンス＆エンジニアリングチャレンジ（JSEC2006）/高校生科学技術チャレンジ（後援）の審査会，表彰式への招待→欠席
・第32回リモートセンシング（協賛）終了御礼，参加者49名，発表27件．
・学術会議より，「声明　科学者の行動規範について」（冊子）が送付された．→HP，News誌10月号載
・学術会議科学者委員会の下に「学協会の機能強化方策検討等分科会」を設置，学協会の自己改革に向けた検討に資する方策を示す．
・消防庁消防技術政策室　消防より，平成19年度の「消防防災科学技術研究技術推進制度」公募案内→News誌12月号，HPに掲載．
・三菱財団より，平成19年度「自然科学助成」ほかの公募案内→News誌12月号，HPに掲載．
・三菱マテリアル資源開発㈱の社長の交代，新：後藤貢（前：青木剛）
・東京学芸大学教官公募記事掲載依頼→News誌12月号に掲載
・北海道史研究協議会ほかから，道立博物館施設等への指定管理者制度導入に関する要望書提出の礼状があった．約40団体から要望書が寄せられ，当局の理解を得る一定の成果があったとのこと．
・大矢暁会員逝去に際し，応用地質㈱社長の礼状および佐々木役員の来訪挨拶があった．

＜検討，確認事項＞
１）産総研地質調査総合センターより，「地質の日」提唱共同発起人の依頼
・５月10日が候補日となっている．共同発起人を承諾．
・地質の日が制定された場合は，地質学会としても支部などが呼応して，全国一斉に行事を開催して盛り上げる．
２）学術会議地球惑星科学委員会主催による，IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」，国際地球惑星年開催宣言式典について協賛依頼（近々に主催者から正式依頼がある）→依頼があれば協賛する．
３）大学評価・学位授与機構から依頼のあった，平成19，20年度の機関別認証評価に係わる専門委員候補者の推薦については下記の６名の方々を推薦することを確認した．
木村　学，齋藤靖二，立石雅昭，永原裕子，三宅康幸，田崎和江
４）NII（国立情報学研究所）より，電子図書館サービスにおける平成19年度の公開条件の変更の要不要の問い合わせについては，変更なしとする．
現状の公開条件（いずれも機関別定額制を許諾）
１．地質学雑誌：冊子発行３ヶ月後無料公開
２．地質学論集：冊子発行１年以内非公開，１年後500円/１論文
３．大会講演要旨：冊子発行６ヶ月後無料公開

会員関係（担当理事-中山）
１）入会の承認
正会員（1）：守屋俊治
正会員割引（1）：中倉弘道
２）逝去（正２）
曽屋龍典（6/7）　大矢暁（11/13），
＜検討，確認事項＞
１）名簿発行の実現に向けて，今後の対応と会員への周知について
・名簿発行アンケート回収数　約1500通
・名簿発行の続きとしては，アンケートを，News誌，HP，年会会場での配布と呼びかけを通して実施してきた．これにより，個人情報保護法18条と24条による従前の個人情報利用が可能であるとの判断をし，回答のなかった約3000名の会員については，前回並みの掲載項目にて掲載する．最終的な手続きとしてNews誌，HPに広報記事を掲載し，２月15日まで更に最終確認をとった上で名簿を発行する．ただし，今年度内の発行はむずかしく，来年６月発行を予定する．

自然史学会連合（担当理事-天野）
連合の意志を学術会議の議論の場に伝え，反映させることのできる，連携会員の名簿の提供依頼については，学会会員を示した名簿を提供して斎木委員に選出してもらうこととする．

会計関係（担当理事-向山）
・準備委員会から高知大会の会計収支報告をうけた．収支の差はごく小額（－５万）であった．
大学施設の無料使用，自治体からの助成金（100万円），企業展示ブース収入（50万円）
＜検討，確認事項＞
１）2007年度収支予算案（概算）について
会員の減少による収入の減少傾向と，事業方針に基づく事業費の削減不可による収支のバランスは，単年度的には支出超過となる．会費の未徴収をなくすために何らかの策が必要．
２）IUGS理事会の経費負担要請について
総経費154万円，関連学会への要請額120万円
地質学会20万円，他関連学会50万円，産総研　50万円
当初予算にない支出であることから，多少の異論も出たが，要請に応じて20万円を支出することを了承した．その際に，地質学会からの財政支援が明示されるような方法を検討いただくこととした．
・札幌大会の予算規模，参加登録費の見直しの必要性について
自治体からの助成金はほとんど望めず，行事内容を充実させる方針となれば，参加登録費などの調整が必要となることが報告された

広報委員会（担当理事-大友）
・アイランドアーク掲載論文（15巻４号）のプレス発表を実施．毎日新聞に掲載された．

インターネット運営小委員会（委員長-坂口有人　担当理事-大友）
来年度のホームページリニューアルにむけて，地質学会情報ネットワーク強化部員といっしょにコンセプト・スタイル・コンテンツ充実などについてメールで議論中．
2007年１月13日（土）夕方-１月14日（日）に東京でインターネット運営小委員会+地質学会情報ネットワーク強化部＋αでブレーンストーミングを開催し，新しいHPのビジョンを議論する．

行事委員会（久田委員長）
＜検討，確認事項＞

1）評議，報告事項の整理
評議事項の3に「札幌大会について」とありますが，すでに11月理事会で方向が確認された「札幌大会への要望」が準備委員会との懇談（12月2日）が伝えられ，そのことも考慮しながら準備が始まっている．従って，評議事項3は，理事会ならびに評議員会議長の了承を得てはずすこととした．報告事項2の1）行事委員会報告を補強するために資料を1つ追加した．
2）札幌大会推進委員会
11月理事会で確認された「準備態勢を，行事委員会，準備委員会，理事会等で仕分けを進めておく」に基づいて，12月2日の札幌懇談会では「理事会に札幌大会推進委員会をつくる．概ね行事委員長が大会の中軸的部分を，企画部分を担当理事が現地と協議しながら支援する．全体の連携については4役が調整する．来年5月から着任の新理事予定者も推進委員会に加わる．」という提案をした．札幌大会での，行事委員会による基軸的部分の確実な推進と，新たな企画の成功のためには，このような役割分担・調整機関が必要である．その準備会合（当面，正副会長と久田行事委員長で出発．司会は伊藤）を，本理事会直後に開催する．
3）2008年秋田大会の開催期日と巡検について
開催日候補
① 9月20（土）―22日（月）
② 9月26（金）―28日（日）
・岩鉱学会との共催について
概ねで，来年鉱物学会と岩鉱学会との合併による「鉱物科学会」との共催が決まった．準備委員長は，水田敏夫氏．
・日程案としては，「鉱物科学会」は25日～26日，地質学会は26日～28日とし，26日を共催日とする，4日間と考えているとのこと．
4）院生，学生の懇親会参加費の検討の余地について
針金評議員から，アンケートの結果が提手出された．評議員会で同評議員に説明していただく．
5）2009年西日本支部での年会は，2月10日の支部総会で開催地を決定予定．

専門部会連絡委員会
1）構造地質部会（部会長-高木秀雄）：3月18日和歌山県田辺市において普及講演会を予定，田辺市，白浜町，和歌山県教育委員会に後援をいただく予定．

国際交流委員会（公文　国際特任理事）
＜検討，確認事項＞
1）日韓学術交流協定ほかについて
・韓国との協定書案，ならびに交流内容を検討し，評議員会に諮ることとした．

地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野　副委員長-久田，宮下＝企画担当）
・現在の編集状況，特に2月号のストック原稿が不足していることが報告された．また，再々のリジェクトに関わらず，4度目の投稿をされた論文に対する扱いについて，編集委員会が粛々と対応するとの方針が報告された．

Island arc連絡調整委員会（委員長-会田，担当理事-Wallis）
＜検討事項＞
・平成19年度の科研費申請を行った．会計管理・監理体制についても審査の対象となることとなり，追加資料の提出が求められた．
・採択後は交付申請の際に，1）見積書の再提出と所定の契約手続き（直接出版費250万円以上のものは，競争入札）をふむこと，2）経費の使用明細書および見積書提出の義務化，3）実績報告時には収支簿および預金通帳の写しの提出の義務化などが新しく決められた．
・本年はすでに補助金の交付がなされているので，来年4月の実績報告の際には，上記の3）項が適用されるものと思われる．
・今後の申請については根本的な検討が必要と思われる．
・ブラックウェル社がジョンワイリー社に買収合併されることになった．今のところこのことで問題は起きていない．
・会田委員長の報告に基づいて，今後の問題点を確認し，評議員会では概要を説明することとした．

名誉会員推薦委員会（伊藤副会長）
・下記階層別の委員，理事会代表委員を選出し，評議員会に提案することとした．
支部長7名：宮坂省吾，高島　勲，清水恵助，新妻信行，八尾　昭，村田明広，西田民雄
階層別4名：大学　磯崎行雄，小中高　紺谷吉弘，会社　安間　恵，官公庁　石垣　忍
理事会1名：中山俊雄
・今後のスケジュール
次回の評議員会までに候補者を選出し，2007年の総会に提案する

2006年度　第3回 定例評議員会議事録

2007年1月26日
日本地質学会評議員会
議　長　三宅　康幸
副議長　新井田清信

日　時：2006年12月16日（土）
13：00―17：30
場所：北とぴあ　701会議室
（東京都北区王子1-1）

出席者：木村　学会長　伊藤谷生副会長
（評議員22名）＜留任＞　阿部国広　荒戸裕之　安間　恵　磯崎行雄　永広昌之　柴正博　納谷友規　新妻信明　保柳康一　三宅康幸　矢島道子（早退）　脇田浩二
＜新任＞会田信行　足立勝治　石垣　忍　石渡　明　井龍康文　小山内康人　紺谷吉弘　新井田清信　針金由美子　渡辺真人
（理事10名）渡部芳夫　天野一男　上砂正一　大友幸子　狩野謙一　公文富士夫　Simon WALLIS　中山俊雄　久田健一郎（早退）　向山　栄
（事務局）橋辺菊恵
欠席者　評議員（委任状13名）：浅野俊雄　安藤寿男　板谷徹丸　井内美郎　岡　孝雄　加藤　進　国安　稔　酒井治孝　徐　垣　田崎和江　田近　淳　松岡　篤　横山俊治
欠席者　評議員（委任状なし5名）：巽　好幸　楡井　久　山路　敦　松田博貴　丸山茂徳
理事（5名）：佃　栄吉副会長　倉本真一　高橋正樹　増田富士雄　宮下純夫
＊成立員数（21/40）に対し，出席22名，委任状13名で，評議員会は成立．
なお14時以降は1名が早退し，評議事項の討論の際に21名でした．
＊荒戸裕之，石垣　忍両評議員を書記に選出．
＊議事に先立ち，木村会長より挨拶があった．

○報告事項
Ⅰ　理事会報告
1．運営財政部会
1）総務委員会
庶務関係（担当理事-上砂）
・北海道史研究協議会ほかから，道立博物館施設等への指定管理者制度導入に関し，北海道知事らに対し要望書提出依頼があり，北海道知事，道議会議長，教育長に要望書を提出した（10/14付け）
・地質情報活用機構（GUPI）より，技術者の認定制度創設のための委員会委員の推薦要請があり，山本高司会員（関東支部幹事，川崎地質）を推薦した．
・産総研より（→削除），JIS A 0204と新規JISの原案作成委員会委員（委員長）の推薦依頼があり，坂幸恭会員を推薦した．
・日本アイソトープ協会「第44回アイソトープ・放射線研究発表会」（07年7月後開催）の共催を承諾し，運営委員として，小笠原正継会員（産総研）を推薦した．
・火山都市国際会議島原大会（2007年11月19－23日，島原市）の後援依頼を承諾した．
・産総研地質調査総合センターより「地質の日」提唱について共同発起人依頼があった．候補日は5月10日．イベント等

を行い，地質学の社会への認知を促すという趣旨．今後は産総研よりの動きに対応して共同発起人として提唱に加わる．
・学術会議地球惑星科学委員会主催による，IYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」，国際地球惑星年開催宣言式典（1/22）への協賛依頼があった．
・大学評価・学位授与機構から依頼のあった，平成19，20年度の機関別認証評価に係わる専門委員候補者の推薦については下記の方々を推薦する．
木村　学，齋藤靖二，立石雅昭，永原裕子，三宅康幸，田崎和江

JABEE委員会（委員長-福澤仁之）
・「JABEEの中で地球資源分野の存在を確保することは，日本の産業界に地質学が市民権を得るためにも意義があり，現在認定された地質系の６プログラムと併せて今後10を越えるプログラムの参加が見込まれているが，さらに多くの大学で認定の検討をいただきたい」との発言があった．

技術者継続教育（CPD）委員会（委員長-担当理事-公文）
・2006年度土質・地質継続教育協議会の報告

関連学会連合（担当理事-天野）
自然史学会連合（運営委員-斎木健一）
・12月９日，総会が開催された．以下報告事項．
1）講演会の実施：11月12日，神奈川県立生命の星・地球博物館において講演会を実施した．昨年から地域の博物館などで行う講演会の形に改め，一般の参加者も多く，連合の認知の効果が上がっている．
2）シンポジウムの共催など：学術会議の中に設けられた「学術・芸術資料保全体制検討委員会」からの依頼で．学術会議の公開講演会「博物館が危ない!美術館が危ない！―指定管理者制度・公共サービス改革法の落とし穴―」を後援した．
3）博物館部会：博物館活動に深くかかわっている加盟学協会会員からの意見を吸い上げ，学術会議などにおける議論に反映できる活動を目指す．
4）2007年度活動方針案
・自然史講演会の開催について，活動の一つの柱として力を注ぎたい．
・博物館部会の新体制作りを急ぎ．具体的な活動方針を確立していきたい．
・ホームページについては前述のような方針で．整備を進めていきたい．

会員関係（担当理事-中山）
前回から今回までの入退会ほか
①入会
正会員（7）：永井甲矢雄，宿輪隆太，佐藤信吾，藤田　宏，鈴木孝弘，佐藤陽一，守屋俊治
院生割引（2）：米原俊生，中倉弘道
学生（1）：米村和紘
②退会　１名（正１名）
三池　力
③逝去　３名
名誉会員［１名］：佐藤博之（10/10），正会員［２名］：曽屋龍典（6/7）　大矢　暁（11/13）
④除籍者予定者：103名（03年からの会費滞納者，07/3月末にて除籍予定）
⑤会員の動静（2006年11月30日現在）

	賛助会員	名誉会員	正会員(内 院生割引)	学生会員	合計
2006.11.30	34	75	4484(290)	42	4635
2006. 8.31	34	76	4462(273)	39	4611
増・減	0	－1	＋22(＋22)	＋3	＋24

⑥名簿発行アンケートを12月22日締めで全会員に配布した．現在の回収数は約1500名である旨の報告があった．どのような名簿をいつ発行するかについて別に評議を行った（別記）．

会計関係（会計委員長-佐々木和彦，担当理事-向山）
・以下三点の報告があった．予算案については別に評議を行った．
・準備委員会から高知大会の会計収支報告をうけた．収支の差はごく小額（－５万）であった．
・11月27日，会計委員会を開催，2008年度予算案（概算）を検討した．
・札幌大会の経費についてはさらに検討の要あり．

2）広報委員会（担当理事-大友）
・アイランドアーク編集委員会からの要請にもとづき，アイランドアーク掲載論文（15巻４号）のプレス発表を実施した．

News誌編集小委員会（担当理事，委員長-大友）

インターネット運営小委員会（委員長-坂口有人，担当理事-大友）
・HPのリニューアル検討，準備中：コンテンツの整理と増加をはかる予定

２．学術研究部会
1）行事委員会（担当理事-久田）
・高知大会の参加者は約700名，台風に見舞われたが，教員関係のもの以外の巡検はすべて実施された．会計報告も出され，経費の収支も小額で収まった．準備委員会，高知大学，高知県，高知大生協，旅行社等ご援助，ご協力いただいた関係各位に感謝する．
・東北支部長および秋田大学地球資源学科長に対し，2008年度の年会引き受け依頼をし，了承された．委員長は白石建雄氏（地球科資源学科），開催日は９月20-22日，26-28日が候補とされている．来年，合併後の岩鉱，鉱物両学会との共同開催についても，双方で検討を進めている．
・札幌大会について，12月２日に会長以下数名で準備委員会と開催の柱等について協議した．準備状況は順調．
・2010年からの開催地について，回り持ちの堅持を再確認したが，開催可能拠点数に鑑みて，以下の通り隣接支部の共催を前提とし，５ブロックとする方向で検討する．
中部支部⇒関東⇒近畿＋四国⇒東北＋北海道⇒西日本
・各支部に遅くとも開催３年前の３月までに開催地の正式決定をお願いする．できれば５年先ぐらいまで決定していることが望ましい．
・2009年は，西日本支部に開催を依頼し，2007年２月の西日本支部総会において開催地決定予定の返事をいただいた．

2）専門部会連絡委員会（担当理事-天野）
・構造地質部会（部会長-高木秀雄）：３月18日和歌山県田辺市において普及講演会を予定，田辺市，白浜町，和歌山県教育委員会に後援をいただく予定．

3）国際交流委員会（担当理事-公文）
・大韓地質学会との交流協定の試案を検討中．日韓交流委員会を国際交流委員会の下に設置予定．別に評議を行った．（→評議事項）

4）研究委員会
(1) 南極地質研究委員会（委員長-廣井美邦）
９月17日に高知大学において第32回南極地質研究委員会を開催した．主な議題は以下のとおり．
・第47次隊（2005/06）の報告（白石）：南極大陸上のS-17地点を拠点として，航空機を用いた日独共同観測を実施した．今回は固体地球物理観測に重点を置き，昭和基地を中心とした大陸氷床から海岸部にかけての重力，地磁気のマッピングデータを取得した．
・第49～51次隊（2007/08/09/10）の計画概要（外田）：第49次～51次にかけて，セールロンダーネ山地の地質調査を計画している．第49次，第50次に関しては，航空機を用いて直接セールロンダーネ山地にアクセスすることを計画している．
・49次隊隊員候補者の推薦：第49次（2007/08）観測隊員候補者として，小山内康人（九州大），馬場壮太郎（琉球大），外田智千（極地研），中野伸彦（学振PD），足立達朗（総研大）を推薦した．
・Geological Society of London Special Publicationの編集について（本吉）：原稿執筆者，予定タイトル，レフリーシステムの確認を行った．

・その他：田切委員から，デジタルクリノメータの紹介があった．

(2) 地質環境の長期安定性に関する研究委員会（委員長-吉田英一）
来年の札幌大会で（公開）シンポジウムを「地質環境の将来予測と地層処分（仮題）」を行うべく，関係各所に連絡をとりつつある．

3．編集出版部会

1）地質学雑誌編集委員会（担当理事，編集委員長　狩野，副委員長　久田，宮下：企画部会担当）
・電子投稿システム（J-ステージ）来年1月号からの運用に向けて，投稿規定を一部改定した．
・電子査読システムの運用の際にファイルサイズが5ＭＢであることについて，画質の維持に難点がある点が指摘され，通信の受け手の都合がある旨の説明があったが，今後改善しながら対応・運用する旨事務局より説明があった．
・編集状況については，慢性的な原稿不足の説明があり，投稿の喚起について，20ページを越える長大論文の受付や，学術大会でのシンポジウムの内容を地質学雑誌特集号として発行することを行事委員会と調整済みであることなどが議論された．この件については別途自由討論を行った．
・CD-ROM版の見学旅行案内書を予定通り発行し，12月号に同封し配布の予定．

2）企画出版委員会（担当理事-高橋）
・地学読本作成委員会（原田憲一委員長）の作業は順調に進行，刊行計画は予定通り達成の見込．
・箱根リーフレットの進捗状況：子供向けおよび一般向けとも今年度中にあげる予定で努力中．
・「フィールドジオロジー」については全9巻のうち6巻が出版済みで，残りの3巻を年度内発行目指して編集中との報告があった．

3）Island Arc連絡調整委員会（委員長-会田信行）
・ブラックウェル社とIsland Arc出版契約の更新を行った（2007年1月―2008年12月の2年間）
・平成19年度の科研費申請を行った．
・補助金の適正な執行に関する改善策として，申請および交付申請の際には下記のことが新たに求められることになり，平成19年度の申請から適用されることとなった．
1．会計管理・監理体制についても審査の対象とする．2．採択後は交付申請の際に，見積書の再提出と所定の契約手続き（直接出版費250万円以上のものは，競争入札）をふむこと，3．経費の使用明細書および見積書提出の義務化，4．実績報告時には収支簿および預金通帳の写しの提出の義務化．

4）Island Arc編集委員会（編集事務局長-竹内圭史・角替敏昭，担当理事-WALLIS）
・委員会報告があり次のことが報告された．
・Blackwell社はWiley社に買収される予定であること．
・伊良部島のサンゴ礁のプレスリリースを行ったこと．
・特集企画が2件進行中であること．
・11月25日現在，オンライン投稿数は8ヶ月間で26編で好調を維持している．
・Island Arc賞の選考作業を開始した．
・Virtual Special Issue on Ophiolites（出版物としては存在しないが，すべてを見ることができる）がIsland Arcのホームページにアップロードされた．

4．普及教育事業部会

1）地学教育委員会（委員長-阿部国広）
・箱根火山リーフレット（教育版）順調に進行中
・地質学雑誌特集号：地学教育の内容項目を選定し，分担して執筆中．

①　地球惑星科学連合「教育問題検討委員会」（委員　阿部国広）
・学習指導要領改訂作業に向けて，平成17年7月29日に文科省へ「すべての高校生が学ぶべき地球人の科学リテラシー－高校『理科』における全員必修科目の創設とその内容に関する提言」を行った．それに接続する義務教育段階での「理科」のあり方に関する提言を行った．
・教育基本法改定の動きの中での学習指導要領改訂作業に向けて他学会で教育提言が行われている（物理学会）．
・地惑連合教育問題検討委員会中に教員養成小委員会が設置され，世話人に中井睦美氏が決まった．
・国際地学教育学会において，地学オリンピックの韓国開催が決まり，11ヶ国参加予定．日本はオブザーバー参加となり，地惑連合が中心となる．担当は静岡大学の熊野氏．現状では日本は準備不足であり，まず層を厚くする必要がある．
・地惑連合教育問題検討委員会教育課程小委員会を中心に日本学術会議地球惑星科学委員会シンポジウム「理科教育の提言を理科として作成していくために（仮称）」を行う．

2）生涯教育委員会（委員長-柴　正博，担当理事-高橋）
・北海道史研究協議会より依頼があった北海道開拓記念館など北海道の博物館施設の指定管理者制度導入に関する要望書について，理事会に意見を提出した．
・地質学会高知大会での夜間小集会および教育シンポジウムの結果について意見交換し，札幌大会で教育普及をテーマとしたシンポジウムを開催することなどを検討した．

3）地質基準委員会（委員長-新妻信明）
・地質基準委員会で行っている三つの仕事について報告された．
・第二次地質基準策定委員会で作成した案の提案があった．性能基準となることを目指し，今年度内の入稿を目指している．関係専門部会は担当委員の選出を行うように要請があった．
・地質学用語辞典の編集委員会はデジタル地質学用語集の刊行に関連して用語の検討を行なったが，それを踏まえ，地質学用語辞典の編集作業を開始している旨報告があった．
・「海の地質基準編集委員会」は「海洋底調査の基本―海の地質基準（検討中）」の書名で編集作業と行っている．

4）地層名委員会（委員長-天野一男）
・2008年のIGCで第三紀第四紀問題に結論が出る予定とのことである．
・地質学用語では扱っていない固有名詞の命名について，以下の問題点が指摘された．すなわち，最近，他分野の研究者が勝手な断層名（固有名詞）を使用し，それが流布されているものが多く見られるようになってきた．政府文書に使用されたりして慣習化すると混乱の原因となる．その対策のためのワーキンググループを組織して対応検討を行なうべきであろう．これについては具体案の提案を受けて議論することになった．

5．その他（理事会関係の委員会等の報告）

1）支部長連絡会議（担当理事-伊藤）

2）地質災害委員会（担当理事-天野）

3）ジオパーク設立推進委員会（委員長-佃栄吉）
・来年の札幌大会において，準備委員会と協力してジオパーク普及のシンポジウムを開催する．市民講演会「地質でまちおこし-ジオパークの試み-」として科研費，研究成果公開促進費Bを申請中．
・ジオパークについては広報活動を積極的に行なうべきであるという意見が相次いだ．また，具体的な企画内容については地域の人々が行うことになるので，支部の力を学会内部から外部へ発揮することや地域へのアピールが必要という意見が出された．会長からは「ＩＹＰＥとも関連させて盛り上げ方を考えていきたい」との発言があった．
・地質学会のウェブサイトにページをオー

プンした．ジオパークという名前の普及からはじめていきたい．

Ⅱ　各種委員会報告（評議員会関係）

1．各賞選考委員会（委員長-酒井治孝）

・各賞の募集開始，News誌10号，11号およびHPに掲載．募集締め切り１月31日来年４月の評議員会までに候補者の選出を行い，評議員会の承認を受ける．

・たくさんの推薦を上げほしいとの酒井委員長からのメッセージがあった．

・（今回設置されたIsland Arc賞（平朝彦委員長）は推薦は受け付けていない．念のため．）

2．名誉会員推薦委員会（担当理事　委員長-伊藤副会長）

・委員長より階層別委員と理事会委員の推薦（５名）があり，承認された．

・委員（委員長＋12名）
各支部長（７名）：宮坂省吾，高島　勲，清水惠助，新妻信明，八尾　昭，村田明広，西田民雄階層別委員（４名）：大学：磯崎行雄，小中高：紺谷吉弘，官公所：石垣　忍，会社：安間　恵
理事会（１名）：中山俊雄

・選考スケジュール
会長，副会長，専門部会長，評議員に対し推薦作業の開始と推薦依頼の連絡（12月中に）
推薦を受け付け締め切り：１月31日
選考期間：２月～３月，来年４月初旬の評議員会までに候補者の選出を行い，評議員会の承認を受ける．
最終決定：2007年度総会　５月

・名誉会員の学会・学界の「顔」としての貢献が指摘され，ホームページに名誉会員の顔写真と業績を紹介するなど，広報担当でも考えたいとのコメントあり．

3．オンライン化委員会（委員長-斎藤　眞）

・参加登録および講演申し込みシステムについて，高知の反省を踏まえて再検討中

4．地質学史アーカイブス委員会（委員　会田信行）

・会田委員から口頭報告

・地質学の分野にはアーカイブの対象となり得る試資料がたくさんあるので前向きに取り組むべき，との意見が出された．

Ⅲ　選挙管理委員会（委員長-関　陽児）

・代議員選挙は，全国区・地方区とも立候補者数が定数内であったため，全員を無投票当選とした．
（News誌，ホームページに掲載済み）

・全国区代議員においては評議員選出のための投票を実施．12月18日に選挙管理委員会開催し，開票を行う．引き続いて代議員の互選により理事選挙を実施する予定．来年１月末にはすべての選挙を終了する予定．

Ⅳ　その他

1．学術会議関係（木村会長）

・学術会議は組織整備が遅れている．日本地球惑星科学連合のホームページ内に「学術会議」のページがあるのでそれを参照してほしい．

2．IUGSおよびIYPE関係（担当理事-佃副会長）

・国際地質科学連合の理事会（IUGS-EC）が，07年２月16日（火）～20日（土）奈良市において開催される．開催経費について関係学会に協力要請をした．

・学術会議地球惑星科学委員会主催で，2007年１月22日にIYPEシンポジウム「国際惑星地球年2007-2009」国際地球惑星年開催宣言式典を開催する．

Ⅴ　理事会審議事項（主なもの）報告

1）札幌大会について

・札幌大会の準備状況について書面にて報告があった．

・四つのポイントとして　1）予稿集のCD-ROM化　2）大学生と企業の接点を作る　3）小さなサイエンティストの集いは，北海道を中心に強く参加を呼びかけるなど，教育関連行事を行う　4）地質学会にあわせて各大学の同窓会を開くことについて札幌大会推進委員会として進めている旨の報告があった．

2）アイランドアーク科研費についての対応
科研費の申請および交付申請について，新たに対応，検討すべきことが生じている旨の説明があった．

3）法人化について
これまでの文科省との折衝から退くことはせず，新法律が施行されない限り，引き続き現行法体制の下での法人化を目指すことを基本方針とすることを再確認した．

4）情報化については評議事項へ

5）国際戦略策定は評議事項へ

6）学術会議「イノベーション推進委員会」からのアンケートに対し，倉本理事原案による地質学会としての提案を行った．

7）2007年度事業方針（案）を策定し検討した．

○評議事項

1．2007年度事業方針，事業計画案，予算案について

・最初に木村会長より「現在の世の中がウェブを中心に回るようになった．そうしたことに対応して学会として効果的に動けるようにすることが重要であり，それが基本方針に反映されている」旨の説明があった．

・特に異議はなく，以下のような議論を踏まえることを前提に承認された．

・引当金に手をつける「赤字予算」は，たとえば会社の場合であるならば（存続の可否を問われかねないような）重大な局面になっているような状況だということであり，今後益々厳しい状況に追いこまれる可能性があることを十分に覚悟する必要がある．

・札幌大会で行事委員会が試みようとしている院生や学生と企業の接点をもうける企画については肯定的な意見が出る一方で，いわゆる「青田刈り」防止協定違反にならぬように注意し，産業界としても参加しやすいような枠組みを求める意見が出された．学術大会に合わせて各大学の同窓会を開催する案とも合わせて，理事会に責任者を置いて対応する旨が会長より出された．

2．日韓他の国際交流について

・大韓地質学会と日本地質学会との交流協定書の締結については，英文表現の詳細を調整する前提で承認された．実質的な交流事業については国際交流委員会の中に「韓国小委員会」のようなものを設けて検討することになった．関連して以下のような意見が出された．

・タイやインドからも国際交流の申し出がある．韓国との関係をきっかけにして国際交流員会の活動を機能させ，国ごとの小委員会を作るなど対応する．

・日本地質学会の会員がアジアに対して個人的なパイプをたくさん持っている点の指摘があり，学会員に大いに貢献してもらうシステムを作る必要がある

3．札幌大会について

特に異議はなし．

4．情報化について

・事業計画案に基づいて進めることが説明され，特に質疑及び討論なし

5．その他

1）会員名簿の発行について

・以下の理由で，アンケート回答者はその回答内容に沿って，無回答者は2004年版にならって同じ項目で掲載した従来規模の2006年版名簿を作成することが承認された．

・個人情報保護法に基づき，名簿に個人情報を掲載することについて全会員にアンケートを実施し，その周知への努力を何度も行ったが，無回答の人が多数いる状態である．そこで個人情報保護法の第18条・24条にのっとり，無回答の人の情報は2004年版に順じて掲載し，作成する．

・無回答であることを「そのまま載せてもよい」という意味であると判断することについては，念のため，News誌で記事を掲載して会員にもう一度確認する

2）院生会員からの要望

・学術大会懇親会の院生参加費を安く（1500～2000円程度）にしてほしいという希望が出された．

・行事委員会で検討することになった．

3）地質学雑誌のオールカラー化

・標記の件が９月の理事会で検討された．現在の出版形態で見積もると１ページあ

たり７万円を要する．形態をまったく変更するというオプションもある．引き続き検討したい．

4）教育関係者の交流の機会

・教育関係者の交流の場について議論された．

・地質学雑誌であれば「ノート」という区分もあるが，News誌のほうが書きやすいということであれば紙面は十分に確保できるというコメントがNews誌編集担当より出された．

5）若手研究者による地質学雑誌投稿

・地質学雑誌への投稿について議論された．国際誌と比べて業績評価が低い点や，リジェクトが多い点，論文指導教官の目が行き届いていないという指摘がされた．結論は出ず．

表紙紹介

南アフリカのSwaziland系（32億～35億年前）
Swaziland System（3.2～3.5Ga-old）in South Africa

写真・文　諏訪兼位　Kanenori Suwa

表紙写真（上）：Barberton山地のOnverwacht層群中位のKomati層（34億年前）．この写真では，６つのflow unit がみられる．ひとつのflow unitは10～20m厚さである．Flow unitの下位はkomatiiteで，弱い変成作用をうけ，角閃石などの変成鉱物を生じているため，ごつごつとした岩肌を呈する．中位はkomatiitic basaltで，スムーズな表面をもち，芝生のような見掛けを呈する．上位は縞状鉄鉱層でグリュネル角閃石（grunerite）珪岩が存在する．（1992年１月18日撮影）．

表紙写真（下）：Barberton 山地のOnverwacht層群中・上位のKromberg層（33億年前）．見事なpillow lavaがみられる．（1992年１月20日撮影）．

始生代早期・中期のSwaziland系は，Barberton山地（Kaapvaal剛塊東部）にもっともよく露出している（図１）．Barberton山地は，19世紀半ば頃から金の産出で知られ，古くから地質調査も行われていた．ここのgreenstone帯は，長さ100kmを超え，Swaziland系（層厚22km）の火山岩や堆積岩からできている．低温の変成作用をうけた火山性岩石は緑色を呈するので，greenstone帯とよばれる．

Swaziland系は下部のOnverwacht層群（33億～35億年前），中部のFig Tree層群（32億年前），上部のMoodies層群（32億年前）の３つに分けられる（図２）．

Onverwacht層群（層厚15.2km）は，下位より上位へ，Sandspruit層，Theespruit層，Komati層，Hooggenoeg層，Kromberg層，Swartkoppie層の６層よりなる．下位には超塩基溶岩のコマチ岩（komatiite）が多く，中位には塩基性溶岩が，上位には中性・酸性の溶岩とチャートが多い．

Fig Tree層群（層厚2.1km）は主に，チャート，グレイワッケ，頁岩からなり，縞状鉄鉱層をわずかに含む．Moodies層群（層厚4.3km）は主に，礫岩，粗粒砂岩，珪岩，頁岩からなり，縞状鉄鉱層をわずかに含む．

これらをとりかこんで，26.9億～35.1億年前の時代を異にするいくつかの花こう岩体が分布する．

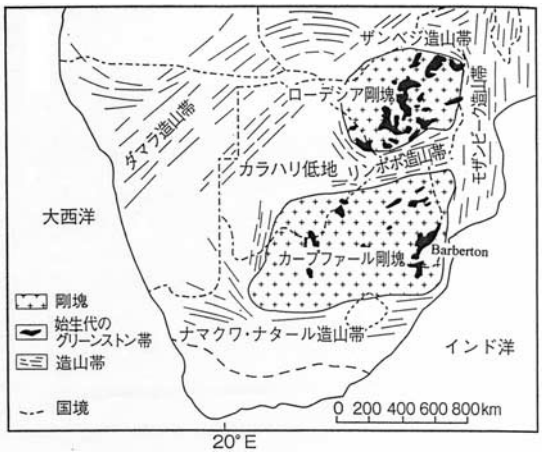


図１．南部アフリカの始生代のカープファール剛塊・ローデシア剛塊・先カンブリア時代の造山帯（Robertsonら，1981から）．カープファール剛塊の東部にBarberton山地は位置する．

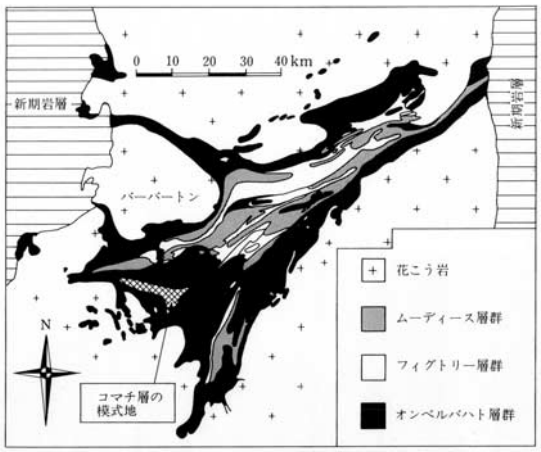
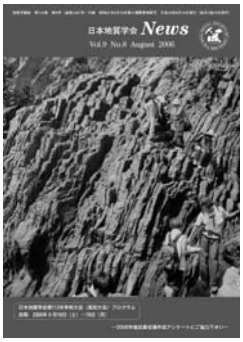


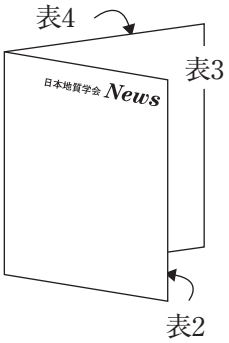
図２．Barberton山地におけるSwaziland系の分布（Viljoen and Viljoen,1969から）．

広告募集

News誌に広告を掲載しませんか.

News誌の掲載広告を募集しています．学会の直接取り扱いになりますので，カラー印刷・掲載サイズなどご相談に応じます．ぜひご利用ください．





＜広告掲載価格表＞

	価格（モノクロ）	版下作成	カラー
表 4	60,000	＋10,000	＋10,000
表 2	50,000	＋10,000	－
表 3	40,000	＋10,000	－
普通	35,000	＋5,000	－

（単位：円）

申込・問い合わせ：日本地質学会事務局
電話　03-5823-1150　FAX　03-5823-1156
e-mail ; main@geosociety.jp

研究室のミニ工場

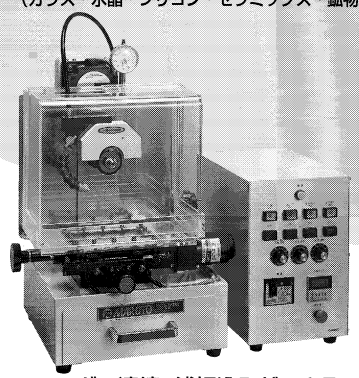
マルトーの
ラボ・ファクトリープラン3点セット

小型　精密　操作簡単　低価格

（ガラス・水晶・シリコン・セラミックス・鉱物・金属材料などの加工）

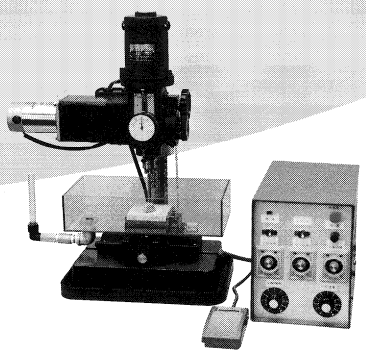
小さな機械（なり）だが役に立つ

磨く　切る　抜く



カッティング　連続・浅切込みができる
ステップカッター〔MC-170〕
●試料へのダメージが少ない
●最小切込み量 10μm／pass
●最大加工能力 H25×L40mm
●設置面積 W550×L450mm
●本体価格 178万円～

ポリッシング　精密鏡面研磨機
ドクターラップ〔ML-180〕
●組織検査用試料のラッピング・ポリシング
●アクセサリー豊富
●研磨試料サイズ φ1～φ100mm
●設置面積 W400×L400mm
●本体価格 45万円～



コアリング　微小径コア抜き取り機
ミニピッカー〔MG-5N〕
●主軸回転数 4000～12000r／min
●加工能力 φ1～φ6mm×30mm
●設置面積 W600×L400mm
●本体価格 125万円～

材料を切る・削る・磨くそして測る技術で奉仕する

http://www.maruto.com

株式会社マルトー
本社／〒113-0034 東京都文京区湯島1-1-10 ☎東京(03)3251-0727(代表) FAX:東京(03)3251-2478
福岡連絡事務所／〒815-0033 福岡市南区大橋1-21-5 岩田ビル ☎福岡(092)512-2755 FAX:福岡(092)561-4288

新製品

無限遠補正光学系採用

MEIJI TECHNO

MX9000 Series

偏光顕微鏡 ■透過照明型 ■反射・透過 両照明型

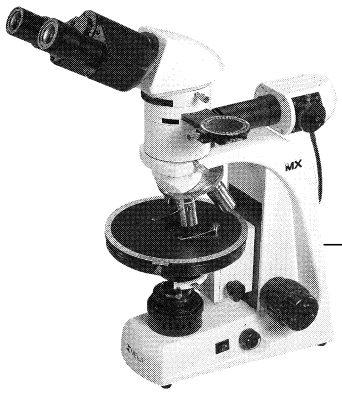
MEIJI TECHNO
MX9000シリーズは、
無限遠補正光学系プラン、
ストレンフリー（歪なし）レンズを
採用した、高級偏光顕微鏡です。
地質学、岩石学、鉱物学の研究上必要とされる
殆どすべての機能をそなえています。

特長

光　学　系：無限遠補正光学系
鏡　　筒：ジーデントップ（Siedentopt,中折れ式）
接眼レンズ：広視野 KHW10X,視野数20 標準装備
レボルバー：芯出し機構付4穴でアーム側（内向き）傾斜ですので、試料（スライド）の交換が容易
対物レンズ：ストレンフリー（歪なし）プランアクロマート 4X、10X、40Xが標準装備
ス テ ー ジ：直径175mm大型回転ステージ標準装備 ポイントカウンター付メカニカルステージをオプション設定
コンデンサー：ストレンフリー（歪なし）アッベ式 N.A.1.25、虹彩絞り付（アリ溝マウント）
ベルトランドレンズ：回転枠入り
アナライザー（検光子）：スライダー枠入り（E-W方向挿入）
ポラライザー（偏光子）：回転式で、0°と90°の位置にクリックストップ付
照 明 装 置：シリーズ全て6V30Wハロゲン電球によるケーラー照明装置が内蔵で、電源は自動電圧切替（100V～240V）です。

MX9200とMX9300の透過照明型に反射照明装置（MA955、MA927/05）を搭載することにより、透過照明と反射照明の偏光観察ができるモデル（MX9420、MX9430）にシステムアップすることが可能です。

（写真はMX9430です。）



MX9420　双眼型
反射・透過両照明付モデルにオプションのMA956回転アナライザーを搭載した例です。

メイジテクノの製品は日本製です。

メイジテクノは顕微鏡の専門メーカーです。
メイジテクノの製品は自社工場で製造します。
メンテナンス、アフターサービスは万全です。

ご請求あり次第カタログをお送りします。

日本顕微鏡工業会会員
メイジテクノ株式会社
〒354-0043　埼玉県入間郡三芳町竹間沢322-1
TEL:049-259-0111　FAX:049-259-0113
E-mail：meiji@meijitechno.co.jp
http://www.meijitechno.co.jp

MEIJI TECHNO

ISO9001
JQA-QMA10273